



Japan
Jenaplan
Association

一般社団法人

日本イエナプラン教育協会ニュースレター

共に生きる



写真提供 森澤典子
森のようちえん「やかまし村」より

好奇心

Vol. **43** 2023年春号

目次

巻頭記事

好奇心：生きた人間のホンモノの問い (リヒテルズ直子)	2
-----------------------------	---

実践報告

・好奇心～自然の中で～ (森澤典子)	8
・好奇心から学習を始める (矢吹卓也)	10
・好奇心は自分をワクワクさせる 大人ができることは何かな? (西澤佳代子)	14
・ライオン蟻のわくわくを、教科の授業でも (八島容子)	19

研究報告

・「20の原則1・2 人間について」 ～教員の共通認識とし、クラスで実現していくための提案～ 性教育を手掛かりにして (稲森理恵)	21
・ペダゴジカル・シチュエーション 好奇心から始まる〈深い学び〉 (濱 大輔)	27

コーナー

・理事同期座談会 (土岐幸司 / 川崎知子 / 山ノ井美美 / 若杉逸平)	35
---------------------------------------	----

研修報告

・2022 オランダ・イエナプランオリエンテーション研修報告 (吹越文代)	37
・2022年度 専門教員資格認定研修 終了報告 (石井七実)	38

活動報告

・岐阜の議員向け学習会の報告 (若杉逸平)	39
・研究部 (山地芽衣)	40
・oVice 会員交流会 (土岐幸司)	42
・各公式学習会・サークル (各代表者・世話人)	43

お知らせ

・公式世田谷・中野学習会について	48
・2023年 ほんの木イエナプラン講座について	

公式学習会・サークルのご案内

	49
--	----

【巻頭記事】

好奇心

生きた人間のホンモノの問い

リヒテルズ直子

好奇心は与えるのではなく、引き出すもの

好奇心といえば、「どうすれば子どもたちの好奇心を刺激できるだろう」と、わたしたちは、大人として、こちらから、子どもたちにどんな働きかけをすれば良いか、と考えがちです。でも、好奇心は、子どもたちの中に、はち切れんばかりにあるのです。むしろ、そういう好奇心を表に出すことに躊躇させているのは、大人たちの方かもしれません。

生まれて間もない子どもたちは、目覚めている間、ほとんど絶え間なく好奇心に動かされて、目を輝かせ、興味のあるものへと手足を伸ばして近づいていき、目で見、耳で聞き、口に咥えてみて、触って、匂いを嗅いで未知のものについて探究しています。

それだというのに、そういう子どもたちが学校に行き始めると、何ヶ月もしないうちに、好奇心で目を輝かせるどころか、何を言ってもつまらなそうに目をそむけ、何を見ても感情や驚きを隠してしまう… 一体なぜなのでしょうか？



ジョン・デューイと好奇心

ジョン・デューイは、その著 "How We Think" (私たちの思考の仕方) の第3章 "Natural Resources in the Training of Thought" (思考訓練における自然のリソース) の中で、人は、ものの考え方を学ぶ上で、考えることそのものを学ぶのではなく、自然の中にある力を使って深く考えることを学ぶべきだということを言っています。そして、その自然の中にある力の代表が "curiosity" すなわち『好奇心』であるとしています。

The wisest of the Greeks used to say that wonder is the mother of all science.(…)The curious mind is constantly alert and exploring, seeking material for thought, as vigorous and healthy body is on the qui vive for nutriment. Eagerness for experience, for new and varied contacts, is found where wonder is found.

ギリシアの賢人は、不思議こそ、あらゆる科学の母であると言っていた (…) 好奇心旺盛な心は、活発で健康な身体が生きるための栄養を求めるのと同じように、思考するための素材を求めて、止むことなく周りに留意し探索しているものだ。新鮮で多様な接触を求めて何か経験せざるを得ないという熱意は、そこに何らかの不思議があるところで見つかる。

ここでは、wonder(不思議)という言葉がキーワードになっています。実際、好奇心とは「不思議だなあ」「どうしてそうなんだろう」と思う気持ちに他なりません。この何かを不思議に思う心の動きこそが、私たちを学びへと動機づけるものです。

だとしたら、教員がしなければならないことは、この子どもたちが「不思議だなあ」と思っていることは一体何なのか、今どんなことに関心があるのか、に寄り添い、そこから、学びへの動機づけを与えるフィー

ドバックをすること以外にはないように思えます。

「好奇心を引き出さなければ」と思う前に、「今、この子は、何に興味を持ち、何に不思議を感じているのだろう」と考えることではないでしょうか。それが、デューイが言う、自然の中に組み込まれている力、すなわち好奇心を使って学びへと導け、と言うことなのです。

教科書や教員用マニュアルブックを開き、「おもしろ実験」や「面白い話」をするのも、確かに一つの方法であるかもしれませんが。しかし、その前に、私たち大人は、自分たちが、子どもの「不思議」に思う気持ちに気付いているか、その不思議がありとあらゆる学問につながり科学的態度につながるものであることを知っているか、が問われているのです。

それができるのは、大人自身が、今なお、物事の「不思議」に心躍らせ、「え、一体どうなっているの」とすぐに「調べてみよう」と自分自身の「知りたい」と言う気持ちに答えてアクションを起こしている、、、そう、「学び続けている」存在である時なのです。

子どもの好奇心を引き出したければ、教師の一方的な考えで、どんなものに引き付けたいかと考えるのではなく、子どもたちの好奇心が活発に動き出すような環境や機会を生み出すこと、そして、そこで現れてくる子どもたちの好奇心が何に向かっているものかに気づき、それを学びへと導いていくこと、それが教師の仕事なのです。少なくとも、イエナプランのグループリーダーはそうあるべきです。

「問い」は一人ひとり異なる：好奇心がアイデンティティを育む

教員用マニュアルブックに頼ったり、みんなで一緒に「おもしろ実験」をすることには、さらに大きな落とし穴があります。

私たち人間は、皆一人ひとりユニークです。持って生まれたDNAも育ちの環境も、人生で出会った事柄や人との関係も違います。それは、生まれたその日からそうです。ですから、私たちは、誰一人として、全く同じ刺激を受けて同じように反応するものではないのです。画一斉授業の問題点はここにあります。ある「おもしろ実験」を見せても、それに本当に興味を感じるかは、子ども次第で、教員の力でそちらに子どもの心に向けようとしても、そういうやり方では、子どもが本当に求めている内発的な好奇心からくる興味には至らないのです。

教科書の指導書やマニュアルブックにある「好奇心を引き出そう」式の刺激には、まあ、こう言うことをやると生徒たちが興味を持つだろう、「おもしろ実験」をすれば大半の子は目を輝かせるぞ、という大人の側の勝手な期待によって書かれています。そして、学校に数年通って、先生の期待に沿うよう日頃から刺激されている子ども達は、あたかもこうした刺激が本当に面白いかのように反応することすらあります。でも、その時、子ども達は、自分らしい育ちという軌道を踏み外してしまっています。自分らしい育ちではなく、大人に期待される育ちという軌道に乗ろうとしている…。それは、先生が教えてくれたことを間違い無く全部受け止めて覚え、それによって物事に自分の方から不思議を感じなくなり、不思議を持つことの喜びを放棄し、探究への意欲を失い始める第一歩です。

不思議だと思う心につながる好奇心は、一人ひとり違って当然です。自分が何に興味を持ち、何を不思議だと感じ、何を探究せずにはおれなくなるのか、この経験を重ねることが、自分のアイデンティティの形成につながります。アイデンティティとは、ユニークな自分自身の姿のことです。人は、自分にしかないアイデンティティに気づき、それを育むことで、かけがえのない自分の存在に気づき、そのありのままの姿で生きられる社会を求め、そういう社会に少しでも近づけたいと社会変革への意欲を湧き立たせるものです。

仲間の異なる好奇心が批判的思考を育む

しかし、アイデンティティが異なるからと言って、他者の興味や好奇心に無関心であって良いとは言っていません。自分にしかないアイデンティティを育てている間に、私たちは、他の人もまたその人なりのアイデンティティを育てていることに気づきます。

いえ、他の人が他のアイデンティティを持っていてくれるからこそ、その他者との対話を通して、私たちは、自分のアイデンティティを一層強く意識できるようになるし、同時に、自分自身に欠けていた視点や物の見方に気づけるようになるのです。

イエナプランが大切にしている批判的思考は、そういう時に生まれます。他の人の立場に立ってものを見直す時、自分の考え方をもう一度深く考え直し、もっと深い見方、もっと広い見方ができるようになるのです。

だから、イエナプランでは、共に遊び、共に話し、共に学び、共に催すのです。

特に、遊びは、大人のコントロールが最も少なく、子ども達が最大限に自由意志を使って行動できる場です。遊びながら見つけた珍しいもの、何かの現象、自分の行為に対する他の人の反応などは、どれも興味深く好奇心をそそるきっかけとなるものです。遊んでいる時、子ども達は、お互いに直に反応し合います。それが、好奇心をもとに、自分と他者との相互作用をハイスピードで進めます。

自然の中で遊ばなくなってしまった子ども達、家にいてコンピューターや携帯電話のゲームに夢中になっている子ども達に、もっと彼らの「自然の力」である、「不思議だなあ」と思う気持ちを刺激するホンモノに触れさせることがどれほど大切かがわかると思います。

好奇心を殺すのは「答え」を覚えさせようとする大人たち

———アインシュタインの言葉———

ペーターセンよりも数年前に生まれたアインシュタインは相対性理論で大変有名になった理論物理学者であることは皆さんもご存知の通りです。彼は「好奇心」(Curiosity)をととても大切にされていて、「好奇心 (Curiosity)」という言葉を使った名言をたくさん残しています。

“I am neither especially clever nor especially gifted. I am only very very curious”

「私は取り立てて利口というわけでも特別に優れた才能があるというわけでもない。私は、ただとてもとても好奇心が強いというだけなのだ」

“The important thing is not to stop questioning. Curiosity has its own reason for existing”

「大切なのは、問いかけるということをやめないことだ。好奇心はそれ自身、存在する意義(理由)がある」

“Never lose a holy curiosity”

「聖なる好奇心を決して失うな」

アインシュタインは、子どもの頃は、言葉を覚えるのも遅く、小学校の時には、何かぼーっとしていることの多い目立たない生徒だったことでも知られています。そして、学校が嫌いで、大学の講義もよくサボっていたようです。そして、有名な物理学者になってからも、学校教育にはとても懐疑的だったことが、次の言葉から窺われます。

“It is a miracle that curiosity survives formal education”

「好奇心が、フォーマルな教育によって殺されることなく生き延びているというのは奇跡と言ってよい」

フォーマルな教育とは、教え諭すという行為が意図的に企画して行われる近代の学校教育を指しています(*これに対して、インフォーマルな教育とは、家庭や地域で、あまり意図的ではなく自然発生的に起きる養育のことで、イエナプランを創始したペーターセンは、この意味で学校でも「教育」ではなく「養育」が行われるべきだと言っています)。アインシュタインは、子ども(や大人の)好奇心は、常に予期しないところで起きるもので、こうした好奇心に満ち満ちて、いろいろなものに関心を向けたり、深く考えたり、探究したりしている子どもの心を無視して、

今日教えるべきことはこれだ、と押し付けてくる教員や授業のあり方が、どれほど有害かと言っているのです。

“It is, in fact, nothing short of a miracle that the modern methods of instruction have not yet entirely strangled the holy curiosity of inquiry; for this delicate little plant, aside from stimulation, stands mainly in need of freedom; without that it goes to wrack and ruin without fail. It is a grave mistake to think that the enjoyment of seeing and searching can be promoted by means of coercion and a sense of duty”

「実際、近代の授業方法が、この聖なる探究への好奇心の息の根を止めさせていないこと自体、奇跡としか言いようがない。この繊細で小さな植物は、刺激は別として、主に、自由であることを必要としてそこに立っている。自由がなければ、この植物は、間違いなく壊れて破壊してしまう。何かを理解することや追求していくことの喜びが、強制や義務感を通して促進されうると考えることほど罪深い間違いはありません。

ここで「植物」に喩えられているのは「好奇心」に他なりません。好奇心は、生き物のようなものだと言っているのです。そして、この、今にも壊れそうな幽けき植物にも似た好奇心は、自由を得ている時に初めて、生き生きと生き続けるものだというのです。学校で、みんなで一緒に何かについて考えましようとか、みんなで一緒に特定の計算問題に取り組みましようなどと言ったやり方は「強制」や「義務感」を伴う学びです。こうした教え方や授業のあり方が、かけがえのない繊細な植物のような好奇心を台無しにしている、と言っているのです。

ペーターセンが、子どもたちの「自由」を尊重したのもこのためです。子供は、自分らしい人格を持った全人的存在になるために、自由を必要としています。この文脈に沿って言い換えるならば、子どもの中に自然の力としてインプットされている好奇心を开花させ、それを元に、自分らしい自分として成長するための学びを刺激するためには、子供達を縛り付けるのでは無く、子どもたちに「自由」を与えよ、子供達の好奇心に「自由」を与えよと言っているのです。

自由は、自分勝手、子どもが学び成長することなく勝手に好きなことをするためではありません。

好奇心が自然の摂理や生きていることの意味に目を覚まさせる

でも、それなら、なぜ、私たち人間は、こんなにも強い好奇心を自然の力として私たちの中にインプットされているのでしょうか。それは、私たち人間が周りの世界で起きていることにアンテナを張り巡らし、その中で、どう生きるのが一番良いかと始終考え続けて生きていくためなのではないのでしょうか。人間の中に、動物的本能のようなものとしてインプットされているのが好奇心であり、それが、私たちに学びの指針を与えてくれます。

“Don’t think about why you question, simply don’t stop questioning. Don’t worry about what you can’t answer, and don’t try to explain what you can’t know. Curiosity is its own reason. Aren’t you in awe when you contemplate the mysteries of eternity of life, of the marvelous structure behind reality?”

「なぜ問いを持つのかなどについて考える必要はない。ただ、問いかけることをやめてはいけない。自分で答えを出せないことについて心配するな。自分が知ることのできないものについて説明しようとするな。好奇心には、自ら理由があるのだ。君は、生命の永劫や現実の後ろにある素晴らしい仕組みの神秘を凝視する時、何か畏敬のような気持ちを抱くのではないだろうか。」

ワールドオリエンテーションの発展に尽力して、オランダのイエナプラン教育の発展に寄与したケース・ボットが口癖のように言っていたのは、「大事なのは、答えを覚えることではなく、問いを持つことだ」「一つの問いを探究して何かを見つけると、次にまた10個もの問いが生まれてくる」と言っています。イエナプランで、なぜ子ど

もたちに、答えを覚えることを教えるのではなく「問うこと」を教えるのか、その理由は、上のアインシュタインの言葉に全く重なるものだと思います。そして、それは、誰かから意図的に刺激されて生まれる、似非の「好奇心」ではなく、自分の内側から湧き起こってくる (intrinsic= イントリンシックな)「好奇心」そのものが生む問いです。この好奇心が、私たちを自然の摂理の神秘に対する深い畏敬の心へと誘っていきます。

“Be a loner. That gives you time to wonder, to search for the truth. Have holy curiosity. Make your life worth living”

「孤独者でいいではないか。一人になるということは、不思議に思ったり、真実を求めて探求するための時間をくれる。聖なる好奇心を持て。君の人生を生きるに値するものにせよ」

もしも、好奇心が生命の神秘への畏敬へ誘うものであるのなら、私たちは、生きている限りその神秘へと近づいていき、それを通して、生きていくことの実感を得続けるべきなのでしょう。

ジョン・デューイは、人間や動植物のように生命のあるものと、石ころのように生命のないものとの違いは、前者が、自分の回りの何かとぶつかって問題を起こした時に、自分の方が変化するという柔軟性を持っていることだ、と言っています。そして、学びとは、究極的にこのことを言っているのです。そう考えると、またもや、アインシュタインの次の言葉が、深く私たちの心に響いてきます。

“Intellectual growth should commence at birth and cease only at death”

「知的成長は生誕と共に始まり、死を持ってのみ停止すべきだ」

さて、私たち、子どもの成長に関わっている大人は、今も生きていますか。今も、変化し続けているのでしょうか？ 求められる変化が何であるかを知るために、周囲に目を凝らしているのでしょうか。世の中にあるありとあらゆる不思議から目を逸らさず、好奇心に導かれるままに「問いかけ」「答えを探して」「探究」し続けているのでしょうか？

子どもたちの好奇心の息の根を止めず、子どもたちに不思議を教え、探究心を持たせるのは、そういう大人自身の学びの姿なのです。好奇心でいっぱいの大人自身なのです。

【実践報告】

好奇心～自然の中で～

森澤典子

子どもたちを連れ出し、自然の中で時間を過ごしていると、その変化や面白さ、心地よさや心地悪さ、自分たちの手には負えない事象に「好奇心」を駆り立てられている姿が見て取れます。

ある日、公園の裏の茂みをみんなで歩いていると苔むした地面に直径 1.5cm くらいの小さな穴があいていました。

「穴があるよ」と声をかけると子どもたちが集まってきました。

「なんだろうねえ」

「小人さんの穴かな」

私は、夏にセミが出てきた穴ぼこだな・・・とわかりますが、もちろん答えを教えたりはせず、子どもたちと一緒に覗き込みます。一人の子が落ちていた枝でつついてみると、穴の中からナメクジやダンゴムシがたくさん出てきました。ちょっと湿っていて暗くて居心地の良い住処なのでしょう。一人の子が「あっ！ここにも穴が開いてるよ」と別の穴を見つけ、やはり枝でつついてみると、またダンゴムシが出てきました。

すると他の子どもたちは、自分で穴を見つけたくなり目をむき出してきよるきよると地面を見渡し始めます。目の色が変わり好奇心に火がついた瞬間です。

よく見ると、あちこちにたくさん穴があいていることに気が付き「あった！」「こっちにも」と大興奮。

これまで何回通っても全然目に入っていなかったのに、好奇心の目で見てみると、急にたくさんの穴ボコが見えてくるようになるのですから不思議ですね。子どもたちは夢中になって穴を探し驚きと喜びで声を上げたり、中をのぞいたりします。

面白くて楽しいから、ますますアンテナをピンと立てます。すると、セミの羽や、抜け殻、葉脈だけになったきれいな葉っぱ、鳥の羽などを次々に見つけ、じーっと眺めたり、お互いに見せ合ったり、あっという間に長い時間が過ぎていきました。

大人が解説したり言葉にしてまとめたりはしませんが、子どもたちは「経験」を通して「感覚的」に自然の中の生き物たちの営みの世界や不思議さを味わい浸っている時間でもあります。

子どもたちの好奇心は、目の前の事象に刺激され、コロコロと変化して行くことがよくあります。ある秋の日、お鍋の中にたくさんのどんぐりを集めた子どもたちは、高いとこ



写真提供 森澤典子
森のようちえん「やかまし村」より



写真提供 森澤典子
森のようちえん「やかまし村」より

ろからころがしたくなって丘の上に登っていきました。

ところが丘の上に立ってみると、目の前に広がる草の斜面に目が行き、子どもたち自身がゴロゴロ転がりました。「みてー！ボクたちどんぐりになっちゃったー！」と嬉しそう。何回も何回も駆け上がりゴロゴロ転がっています。大人も転がります。空と草が交互に目に映り楽しくなってみんなケラケラと声をあげて笑っています。



手作り滑り台。最後は泥んこの中にジャボーン！
写真提供 森澤典子
森のようちえん「やかまし村」より

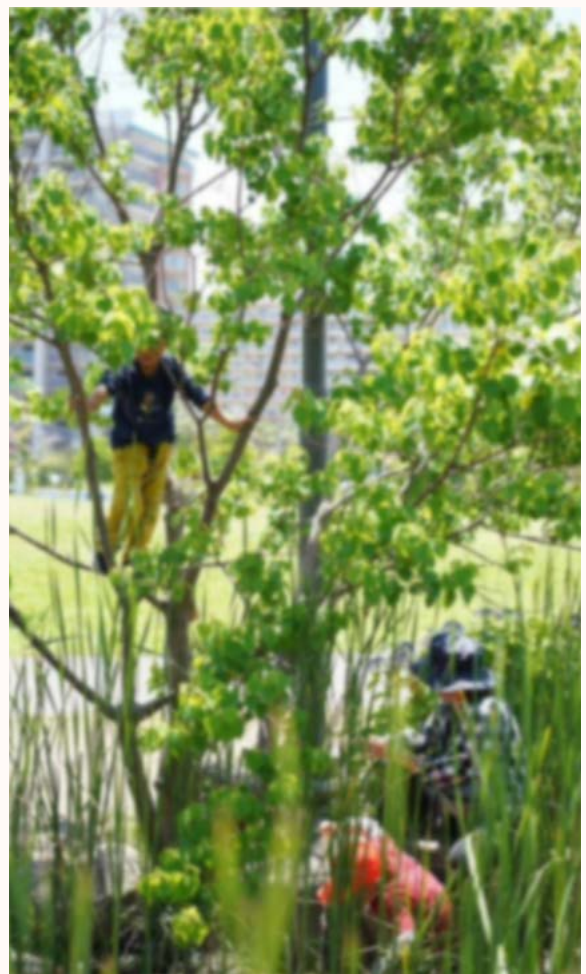
駆け足で降りてくる子どももいます。斜面に足がカラカラ早回りして動いて、それがなんだかおかしく笑いながら走っています。内側から何かが解き放たれていくような感覚を覚えます。息が切れてくると「あー楽しかった！」と丘の麓で寝っ転がったまま、しばらくみんなで空を眺めていました。すると誰かが「あ！どんぐりてっぺんに忘れてきちゃった」「あ！わたしもー」とまた駆け上がっていきます。忘れて来たことが楽しくて、また笑っています。

こんなふう子どもたちは目の前に広がる景色や友達の動き、その時々予測不能な出来事に目を輝かせ、楽しい！もう一回！と突き動かされながら衝動的に、そして気ままに遊びを変化させていきます。夢中で飽きるまで繰り返し、いつのまにか難しかった丘の斜面をいとも簡単に登れるようになっていたり、根っここの張ったでこぼこ道でも転ばなくなっていたり、楽しさを共有した満足感や信頼感から、周りの様子を感じ取って、小さい子の手を引いたり、「そろそろご飯にしよう」と見通しを持って自ら声をかけたり、様々な成長や変化も見られます。

このように保育の中で子どもたちの経験、反応、欲求や不安、変化や成長の「見通し」や「ねがい」を持ちながら、子どもたちの主体性や自由を保障し、好奇心を駆り立てられる場、特に自然との出会いを用意し、本能を使って、季節を問わず「水」「土」「砂」「火」「木」で遊ぶことを大切にしています。

幼児に火あそびなんて危険なのでは？という方もい

ザリガニや虫探しに夢中
写真提供 森澤典子
森のようちえん「やかまし村」より



らっしゃるかもしれません。

もちろん危険ですが、だからといって遠ざけたりはしません。風向きや距離など、気をつけるべき最小限のことは伝えますし、大人は火のそばを離れません。留意すべきことを事前によく打ち合わせもしています。その上で何度も繰り返し火を起こし、燃やし、炎を眺めるうちに、子どもが「これ以上近づいたら熱い」「こちらに立つと煙たい」「薪を一度にたくさん焚べたら火が消える」「火は魅力的」「火は怖いもの」といったことを学んでいきます。

大人が信じて見守ること、任せること、「自由」であることで、子どもたちは「信頼されている」「大切にされている」と実感し、情緒が安定し、必要なことを自ら守ろうと変化していきます。その中でたくさん失敗もしますが、安心して居られる人や環境の中で自ら学び乗り越えようとする姿が多く見られます。特別に大声で注意などしなくても、そんなに危険な行動を取ったりしません。

だから「経験を通して面白さも危険も学ぶ」ことが大切だと感じています。面白いこと、興味があること、やってみたいことだから、ルールや決まりを自分たちで考えられるし、先人を尊重し耳を傾けたり約束を守るようにする姿が見られます。危険だからと遠ざけては危険を学ぶ機会すら奪ってしまいますし、危険な行動



「たんけん たんけん」
写真提供 森澤典子
森のようちえん「やかまし村」より

をとるだろうと大人が予防線を張りすぎて先回りしてしまうと、大人の言葉や規制が多くなってしまいます。すると頭だけで理解しようとして受け身になってしまい挑戦したり本能的な経験ができず、面白さも失われますし、注意する人がいなくなると決まりも忘れてしまいます。

自然は子どもたちの一番の玩具、遊び場、発見や学びの場であり、好奇心を掻き立てられ本能を呼び醒まし、心も身体も健康にしてくれる場だと感じています。

時に失敗しながら、自分の限界や危険を感じ取りながら、実際に見たり試したり、心行くまで遊び試させてもらえること、その経験の積み重ねが心や身体を育てるだけでなく、身近な自然や人、社会を信頼する気持ちも育まれていくことを子どもたちの姿から感じています。そしてその源こそが「好奇心」なのです。

森澤 典子

幼稚園教諭、主任を経て、地元で森のようちえんを運営したり（現在休園）

自宅を開放して小中高校生向けの学習塾を家族で運営。

幼児教育と学校教育の繋ぎ目や保護者・地域との関わりに重きを置き実践を続けてきた。

1998年フレネ幼・小学校で教育実習(2ヶ月)

2017年オランダ・日本イェナプラン教育専門教員資格取得

好奇心から学習を始める

矢吹卓也

○はじめに

「箕面こどもの森学園」で低学年クラスの担当スタッフをしている矢吹卓也と申します。「箕面こどもの森学園」（以下、こどもの森）は、子ども一人ひとりの個性を尊重し、民主的に生きる市民を育むことを目的としたオルタナティブスクールです。フレネ教育やイェナプラン教育をベースに、ESD（持続可能な未来をつくる教育）を行っています。



本稿では、「好奇心」に関連する実践として、こどもの森の「プロジェクト」という時間について紹介します。

○プロジェクト～自分の好きなことややりたいことができる時間～

こどもの森では、「プロジェクト」という自分の好きなことややりたいことができる時間があります。お昼休み以降の4・5コマ目の時間はだいたいプロジェクトの時間があり、子どもたちはそれぞれ自分の好きなことややりたいことに取り組んでいます。

	月	火	水	木	金
9:00～9:20	ハッピータイム				
9:20～10:00	ことば・かず	ことば・かず	ことば・かず	ことば・かず	ことば・かず
10:10～10:50	ことば共同		ことば共同	テーマ	
11:00～11:40	スクールワーク	テーマ	プロジェクト/選択	テーマ	学習計画
11:40～13:00	昼休み		ミーティング・掃除	昼休み	
13:00～13:55	プロジェクト/選択	プロジェクト/選択		全校集会	プロジェクト
14:00～14:40				プロジェクト/選択	
14:40～15:00	ミーティング・掃除			ミーティング・掃除	

好きなことややりたいことというものは人それぞれです。個別にやっている人もいるし、共同でやっている人もいます。以下は、やっていることの例です。

- ・スライムづくり
- ・お家づくり
- ・木工で武器づくり
- ・実験
- ・イラスト
- ・劇づくり
- ・クッキング



プロジェクトは「やってみたい」「気になる」という気持ちから始まります。

例えば「スライムづくり」を始めた子は、他の人がプロジェクトでスライムをつくっているところを見たことをきっかけとしてスタートしました。

「スライムってどうやってつくるんだろう？」

「スライムにもかたいものやとろとろのものなどいろんなものがあるぞ」

「あのスライムの色きれい！自分もつくってみたい！」

そこには、いろんな形の「好奇心」があります。プロジェクトの時間は湧いてきた好奇心をすぐに実行できる時間なのです。週の終わりに来週のプロジェクトの計画を立てますが、計画はそのときの自分の感覚に合わせて変更することも可能です。

好奇心を満たせる時間がほぼ毎日確保されていることや、その続きを自分のペースでやっていける時間がたっぷりあること。プロジェクトとは、子どもたちの好奇心を自分のペースで満たしていける時間なのです。

○好奇心を満たすためにいろんな試行錯誤ができること

プロジェクトの時間は、多くの方が同じプロジェクトをやり続けています。同じプロジェクトですが、子どもの話を聞くとそこには様々な試行錯誤があることがわかります。

(スライムの例)

「今回はな、少し固めにつくってん。」

「一度出来上がったスライムもイメチェンできるねん。石鹸入れるとふわふわ、水を入れるととろとろになるねん。」

「失敗したと思っても、頑張っって混ぜ続けたらちゃんと固まんねんで。」

「こうしたらどうなるだろう?」「これやってみたいな」があるとプロジェクトはとても充実した時間になります。プロジェクトで大事なことは、その人自身の「好き」や「やってみたい」という気持ちと繋がっていることです。



スタッフは子どもたちとのやりとりを通して、「その人自身がやりたいことをやっているか?」ということを見ています。

その人自身がやりたいことではなく、周りの人に流されて目の前のプロジェクトに取り組んでいるようなときには、その人の学びには繋がりにくいのです。そんなときは、その人と「最近どんなことに興味があるか?」「どんなことが好きか?」という話をして、その人の好奇心や興味関心からプロジェクトを始められるようにサポートしていきます。

○プロジェクトの意義

このように自分の好きなことややりたいことから学習を始めるプロジェクトの時間ですが、その意義は2つあるように思います。1つ目は、自分の好きなことや、自分自身について知れること、2つ目は、自分の人生をデザインする力を育てていけることです。

先日、研究発表会というプロジェクトの発表の場で6年生の人たちが、「長期プロジェクト」として、6年生の1年間の間に取り組んできたプロジェクトの発表をしていました。そこで、6年生の人たちが話していたことが、この二つの気づきに溢れていてとても素敵だったので紹介します。

①自分の好きなことや、自分自身について知れること

ピアノを独学でずっとやっていた子は、「自分にとってピアノはやり続けていても苦にならないし、自然とやりたくなってしまおう」ということを話していました。人が生き生きするのは、本当に自分がやりたいことをやれているときだと思います。自分自身がやりたいことと出会い、それに取り組んでいる時間は、満たされた自由を感じるとても幸せな時間だと思います。

②自分の人生をデザインする力を育んでいけること

サッカーの技術向上に取り組んだ子は、目標を立てずにサッカーの練習をしていた以前の自分と比べ、目標を立ててやった方が達成感を感じられて良かったことや、学校の庭が狭くサッカーがしづらかったため、全校集会で仲間を集めて、自分でサッカー場を予約して、練習しに行った話をしてくれました。

ただ練習するのではなく、目標を立てて一つずつ実現していくことの価値や、環境が限られていても、自分たちの工夫でやりたいことを実現していけるということを身をもって証明してくれて、発表を聞いた人の中には、感動して涙する人も出てくるような素敵な発表の場となりました。

○終わりに

学習の場とは、上で書いたような好奇心をスタートとして、その人や周りの人が生き生きする状態であることが大事だと思います。そのような自分自身の感覚に対して真正性のある学習環境では、こども達は自然と主体的になるし、そのための環境と時間があれば長い時間をかけて深い変容が起こります。このような深い学びをこれからも大事にしていきたいです。

今回の寄稿の依頼をいただいたおかげで、改めて「好奇心」について考える良いきっかけになりました。「好奇心・興味・関心の違いはなんだろう?」とか「好奇心には問いが生まれるような『?』マークのものもあれば、やってみたいと惹かれるような『!』のものもあるな」など。イエナプランでは、ハテナマークの問いの形が中心になっているような気がしましたが、こどもの森のプロジェクトはびっくりマークの「やってみたい」の比重が多いように感じました。「この違いはなんだろう?」ということについてはまたの機会に考えてみたいと思います。今後も学習者中心の学びの形について私自身も探究していきたいと思います。

好奇心は自分をワクワクさせる 大人ができることは何かな？

公立小学校 3年担任 西澤佳代子

はじめに

私事であるが、私には小学校3年生を筆頭に6人の孫がいる。私自身は、6人兄弟の末っ子で育ち、15歳の時から、病弱な母に代わって、姉たちの赤ちゃんを見る機会が多くあった。一般の人よりも、生まれたばかりの赤ちゃんの成長に関わる機会が多く、また私自身は、末子であったので、自分よりも年長者の経験を見る機会が多い人生を歩んできたと思う。このことは、発達を見守る立場として深い経験となったと感じている。

ご存じの通り、乳幼児は好奇心の塊で、ひと時もじっとしていない。と思いきや、そうではない子もいる。じっとして、好奇心旺盛に動き回る子をつぶさに観察している子もいる。音の刺激が強すぎて、泣いてしまう子もいれば、ひとたび絵本を手にしたら、そのような刺激を与えても、反応しない子もいる。まさに十人十色で、本当におもしろい。一人でいるときと、大勢でいるとき、母親がいるときといないときでは、別人のような子どももいる。

小学生の孫3人は口をそろえて、保育園は楽しかった、学童も楽しいが学校は面白くないと言う。先生の長い話を聞くのが嫌だと言う。ルールが分からないから、やらずに見ていたら、やる気がないなら帰りなさいと怒られたと言う。それで、通知表に△がついたと思うと話すので苦笑してしまった。



生まれ持ったその子らしさと、環境（刺激）との中で、発達が促され（あるいは閉ざされ）、その子らしさが形成されていく。そんな一人一人に、幸せでいてほしいと心から願う。

子どもとかかわる立場の人間として、私にできることは何だろうと考

えたとき、一人一人の子どもの幸せを一緒に考えることなのかなと思っている。

幸せって、どんな状態？それは、人によって異なるのだろう。

そのためには、安心安全が保障されていることが、とても大切だ。

不安がある状況で、ワクワクした気持ちをもつことは、困難だろう。

子どもたちの好奇心を育むためにはまず安心安全の教室があること。

このことが保障されていることが前提として好奇心を考えたい。



そもそも好奇心とは？

新奇的な物事または未知の事柄に対する興味。ものずきの心（広辞苑）

好奇心は、生得的なものであり、新奇さ、意外さ、複雑さなどの刺激特徴に接して生じるが、何が新奇であり、意外であり、複雑であるかは、経験により異なっているので実際には習得面と関係する。また、個体差があり、同じ状況に置かれても好奇心の程度は異なる。（日本大百科全書）



辞書の定義によれば、一つの学習課題を提示しても、好奇心をもって取り組む子どももいれば、まったく好奇心をもつことがない子どもがいることは、当たり前と言えよう。学習資源が提示され、自分の好奇心にしたがって、学習課題が設定できるのであれば、その好奇心は持続し、探究心へとつながっていくと考えることができる。

また、人は、モノに好奇心をもつこともあれば、ヒトに好奇心をもつこともある。

好奇心のなかったモノにも、そのモノに好奇心をもって取り組んでいるヒトに好奇心をもつことでモノにつながることもある。

兄がやっていることに、弟が好奇心をもつことや、友達がやっていることに好奇心をもつことがその例と言える。

教室の中の一人ひとりの違いが、うまく働き合って、ある子にとってちょうどよい学びを生むことがある。自由進度学習なるものを実践しているが、異学年学級ではない本学級の学びの選択は、とても自由なため、先に学んでいる子の楽しそうな様子や失敗などが、後に学ぶ子に多に影響することがある。ある子どもが経験したことや環境を他の子に結びつけていくことが、学級の教師の役割であると考えている。



自然の中に放り込んでやると、子どもは好奇心いっぱいになると言われている。自然は、新奇さ、意外さ、複雑さで満ちているからである。

しかし、私の勤務する学校は、自然とは程遠い都会の中に位置しており、日常的にその世界に浸ることはできない。

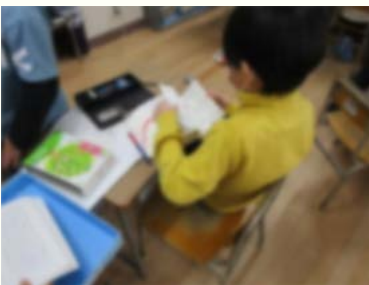
そこで、私は、安心安全な教室を作りつつ、毎日行われる当番の仕事を核として、教科の学習と結び付け、子どもたちが、自分なりの課題を設定していけるように好奇心をくすぐっている。



小学校3年生での実践

(好奇心の新奇さ・複雑さ・意外さは個人差を考慮して)

新奇さと出会ったらまずはやってみようと自分が決めるまで待つ



リコーダー、絵の具、習字、そろばん、国語辞典など新しい学習用具を扱うことの多い3年生。生活科から、理科・社会という新教科とも出会い、総合的な学習の時間にも出会う。3年生になったこと自体が、新奇さでいっぱいである。

ここでは、教えないこと。まずはやってみようと、じっくりたっぷり経験する時間を確保する。トライアンドエラーの繰り返しで、何度でもチャレンジできるように、いつでも、さわれるように、教室の中に学習用具をおいておく。

失敗したらどうしようという考えが頭によぎる子どもたち。何回転んでもいい。

転んだら起き上がる方法を学ばばよい。そのうち転ばない方法が身につく。やらされる、と分かった瞬間、子どもたちから好奇心は逃げていく。だから、子どもがやり始めるまで待つ。やるかやらないか自分が決めることができる。自分が意思決定できることを経験すると、安心が生まれ、自分の行動に責任を果たすことを経験することができる。自分が決め、自分が責任を果たすことにより、その経験は、自分のものになる。友達が失敗する姿を見て安心する子もいれば、不安になる子もいる。新奇場面に苦手な子もいる。そうしたいろいろなヒトと出会い、触れ合うこと自体が人間関係形成力も養っていく。

複雑さを個に応じて設定できる支援をする

さらに教科学習では、すべての教科を選択できるという複雑さを加味することで、子どもたちの好奇心は膨れ上がる。与えられた時間割ではなく、自分で時間割を作っていくことは、計画する力や修正する力を養っていく。誰一人同じ時間割はなく、組み合わせの数は無数で、複雑である。これならやれそうだという見通しをもてることで、複雑さを調整して好奇心を高めるようにしている。

少し紐解いたら、ほぐれていくような複雑さを、子どもが設定できるように支援していく。



意外さを設定する

低学年で、先生に与えられた当番活動に慣れている子どもたちは、朝の会帰り会、給食、そうじのやり方を先生から教えてもらおうとする。クラスのルールを先生に決めてもらおうとする。何かするたびに、「先生〇〇していいですか？」と許可を求め聞いてくる。

これらをすべて、自分で決めるんだよ、と伝え、今までと違う意外性に驚きをかくせない。

これまで、与えられることで好奇心を奪われていた子は、「こんなこともしてみたい。」「あんなこともしてみたい。」と、生き生きとする。決められて行動することに慣れてしまっていた子は、戸惑い、ひとたび躊躇するが、時間の経過とともに、自分で決めることができる喜びを味わう。

毎日の当番活動から好奇心を育てる

3年生の社会科の学習で、働く人と私たちの暮らしとの関係を学ぶ。働くに焦点をあて、学級の当番活動を「仕事」として好奇心をもって体験していくことでワクワクした気持ちで学ぶ機会とした。これは、市民感覚を養っていくうえでも重要である。

①そうじの時間で好奇心を

4月「わがクラスは、教室・廊下・手洗い場・トイレが担当区域、やり方も人数も自分たちで考えてね。ゴールは、きれいにすること。」と子どもたちに手渡す。

子どもたちは、きょとんとした顔をする。2年生までは、そうじは先生が決めたやり方で、班ごとに順番にやっていた。クラスによってやり方も違っている。トイレ掃除なんて、やったことがない。やり方も分からない。好奇心いっぱい、やりたい人がクラスの半分ぐらいいて、初日トイレの中で身動きが取れないくらいだった。教室そうじは、4人ぐらいしかいなくて机を運ぶのにも時間がかかっていた。

これは困ったと、サークル対話で、それぞれが希望を出し合いながら、人数調整がなされ、担当が決まった。1学期間同じ場所をやり続けることにした。やっていて問題があれば変えていこうということになった。



そうじのやり方を研究することになった子どもたち。教室のガラス窓を掃除する子が、水拭き雑巾でほこりを取ってきれいにした、とみんなに自慢していた。が、時間が経つと、ガラス窓には水拭きの跡が残り、余計に汚いガラス窓になってしまった。みんなに、前より汚いよと言われ、雑巾が汚いからいけないのだろうと、雑巾を必死に洗っていたが、それでもガラス窓には、水拭きの跡が残っていた。いろいろ試しながら、最後は、水拭きした後からぶきするときれいになることを見つけてきた。

今は、両手に水拭き雑巾とからぶき雑巾をもってそうじしている。

女子トイレの床は、クッションフロアーが敷いてあり、黒く汚れが付着していた。普通に雑巾でこすってもとれない。スポンジでもとれない。いろいろ試して、水を含んだ亀の子だわしでこすって、乾拭き雑巾でふき取ると取れることがわかった。いろいろな方法で試行した結果である。

この2つの先行事例は、他の子どもたちの活動に、大きな影響を与えた。MUSTのそうじ場所を終えると新たなそうじ場所を開拓したり、ほうきの使い方など掃除道具の使い方を研究したりする子も出てきた。落ち葉の季節になると、教室前のテラスを知らぬ間にそうじをしていて、落ち葉掃除に使いやすい箒と使いにくい箒があることを見つけていた。

教室の床の汚れは、消しゴムで取れるもの（研磨）、水拭きで取れるもの（溶かす）がある。習字の墨をこぼしたときは、大量の水で薄めながら拭き取るとうまくいく。便器は、ホースの水でそうじをするよりも、霧吹きの方が汚れ落ちがよい。その結果から、なぜ？が始まり、調べている子もいる。

こうした態度は、学習場面でも、多く見られるようになった。ボールを遠くに飛ばすには、どのように蹴ったらいいのか観察したり実験したり調べたりして、「足の指はグーにして、スピードをあげてける」などの結果を得ると、なぜそうすると遠くに飛ぶのか？と次の問いを出し、調べていくことにつながっていった。



与えられた課題に、自分なりの課題を見つけることができるようになった。MUST（やらなければいけない）がいつのまにかCAN（できる）に変わり、もっとWILL（やりたい）に変わっていった。

②給食の時間で好奇心を

昨年度ふれあい活動の取り組みでSDGsの食品ロスを探究した子どもたちは、給食の残食がなくなるようにしたいと考えていた。昨年度、それぞれの学級で相当量の残食が出ていて達成していないとのことであった。昨年西澤が担任していた学級は残食なかったか？と言うと、どうしたら残食はなくなるのか？と、子どもたちは前のめりになっていった。

自分たちで考えて何回でもチャレンジしてみてね

と声を掛け見守った。

初めは、同じ量をつぎ分け、減らしたい子は減らすという方法をとっていたが、配膳自体に時間がかかり過ぎるということで、次に子どもたちが考えたのは、食べられる量をつぎ分け、余った分を食べられる人がおかわりする、という方法だった。

ここにも試行錯誤が見られ、朝の会で体調を確認。小盛を望む人を把握して配膳。それでも多いときは、その後自分で減らす。とにかく付けた量は食べるというものであった。完食にこだわり過ぎて、無理して食べている様子も見られたが、おたまひとすくい、どれだけの量になるのか調べたり、食べ方によって、食べやすくなる方法を見つけたりするなど、自分たちで工夫を重ねていった。

そうした中、拒食症とされていた子どもが、相当量食べることができるようになった。その子どもに理由を聞くと、

何回でもチャレンジできるから。一度に決めないで、少しずつ食べて、食べられたらおかわりをするという方法が、自分にはあっているからと答えていた。食べる量も決められるのではなく自分で決めることができたことが大きいらしい。

また、汁物の具は、下に沈んでいるので、おたまを下まで沈めてからすくいあげないと、汁ばかり入って具が残ってしまうから注意が必要だ、とか、ご飯の一人分は、全体を6分割にして、その一つを5分割にしたものが一人分の分量になるなど、理科的思考にかかわる気付きや分数を使って量を導き出す活動が見られた。

そのときにも、汁に浮く食品や沈む食品があることから、食品の大きさが関係しているのか、形が関係しているのか、食品そのものが関係しているのか興味を持っている子どもが出てきて、今調べているところである。

また、しゃもじでご飯をつけるのであるが、手首の返しがうまくいかず、配膳台のまわりはご飯粒だらけになり、どうしたらうまくつけることができるのか、上手にできる子がインストラクションしている場面もあった。「とにかく経験することだ」とか「しゃもじを残りのごはんのあるほうに押し付けてつけるといい」とか、「下からすくうようにつけるといい」とか話し合っていた。てこの作用にかかわる内容であるが、家庭からは、家でご飯や汁をつけさせてほしいと子どもから頼まれたという話もあった。

勉強でも食べ物でも、苦手なものへの取り組みを0にしないで、少しでも取り入れてみると見える世界が変わるかもしれない、と言う教師の話から、やってみようと考え、野菜を食べるようになった子もいた。残食をなくすという学級課題から、自分なりの課題を設定して、配膳の工夫、食べることへの工夫につなげ、課題を解決している姿があった。毎日残食0となっている。

③日直の仕事で好奇心を

給食当番が1週間ごとに交代するのと同様に、日直当番も1週間ごとに交代するシステムにした。4月当初、日直当番の仕事は朝の会帰りの会の伝達事項や欠席の友達へのお手紙を書くことぐらいであったが、必要に応じてどんどん増えていった。たとえば、教科の学習内容に伴って、育てている作物の水やりや観察報告などが加えられていたり、給食の配膳台の準備や片付けだけでなく、残食量をみんなに知らせ、おかわりを促したりした。給食当番をやっているときに、誰かがやってくれるといいなと感じたことを、翌週日直として実践している感じである。誰かがやるとよいけれど、決まっていなければ日直がやるようになっていった。自分に何ができるかな？という視点で、新しい必要な仕事を創造していく取り組みとなった。



おわりに

毎日、教室に昨日とは違う何かを設定している。新しい掲示物があるとか、教師の机の位置が変わっているとか、ミッションが与えられているとかである。順に教室に入ってきた子どもたちが、それを見つけて話題にする。何も用意しない日もある。今日は何も無いね、と見つける。子どもたちが、話題にしたいものを手にして教室に入ってくると、朝のサークル対話はそのことで盛り上がる。

子どもが頭にアンテナを立て、何かおもしろそうなことはないかな？と考えるとワクワクできるのではないかな、子どもが心にアンテナをはり、誰か困っている人はいないかな？と思いやると、温かな気持ちになるのではないかな？と思う。

教室には、「みんなのちょうどいいを見つけよう」「わたしはわたしの好きなことをして、あなたはあなたの好きなことをして、それがだれかのためになったらすてき」と貼ってある。子どもたちが、今日の自分を好きでいられるように、自分の内面を見つめ、自分の外を知るきっかけになればと、今日もせっせと種をまく。



ライオン蟻のわくわくを、教科の授業でも

ドルトン東京学園中部・高等部 八島容子

はじめまして。ドルトン東京学園で働いている八島容子と申します。なぜドルトンプランの人が…?と思われる方もいらっしゃるかと思います。私がイエナプランと出会ったのは今から10年ほど前のこと。伝統校に勤めていて「教育はこれでよいのだろうか」とうっすら疑問を抱き始めた頃にイエナプランを知り、「こんな教育があるのか!」と衝撃を受け、それ以来細々と学ばせていただいています。中でも、子どもの学びを見つめるまなざしにとっても惹きつけられていて、ヨス・エルストヘーストの論文『ライオン蟻に聞いてごらん』(※)を読んだ時、こんな風に子どもたちが目を輝かせて探究者になっていくような授業をしたいと思い、試行錯誤をしながら今に至ります。



私は中高生の数学の授業を持っているのですが、世の多くの数学教員と同じように、私も生徒から「数学って何の役に立つの?」という言葉を受けつけられ、ぐうの音も出ないことが少なからずあります。数学の考え方はどの人にも役立つものだけれど、数学そのものが役立つ実感は得づらく、特に文系の進路を目指す高校生にとっては、高校を卒業するためだけにその場しのぎに公式を暗記する(そしてすぐ忘れる)なるべく触れたくない嫌なやつとして位置づけられがちです。この子どもたちにとって、この週5時間の授業の意味は何だろう、この思春期の貴重な時間にちゃんと何かを得られているのだろうか…とふと気づいたとき、どの生徒にも何かを得てもらいたい時間にならなくてはと思うようになりました。

それから私は、数学を使うと解決の見通しが立つような社会事象を題材として授業に取り入れるようになりました。話が数学教育の方に寄ってしまうので割愛しますが、それにより「何の役に立つの?」とはあまり言われなくなりました。学ぶ意味があるとして認識してくれているようです。それでも、生徒たちにはどこか「やらねばならないもの」という気配が漂います。どうしたら生徒が主体的な学び手になるのだろうか?

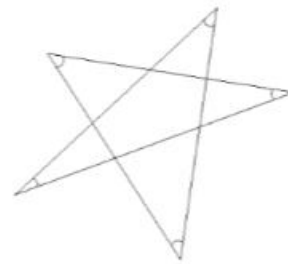
そんなある日、一人の生徒が「世界一飛ぶ紙飛行機ってどうやって作るんだろう」とつぶやいたことをきっかけに、私も含めその場にいた生徒たちが黙々と二時間ひたすら紙飛行機を作っては試し続けるという出来事が起こりました。(今勤務している学校は、比較的ゆとりをもって生徒や教員がやりたいことをできる時間があります。)紙飛行機については生徒の方が私よりよほど詳しく、私は生徒に交じってただただ作っては試す一探究者になっていました。その何と楽しかったこと。この時感じた没入感、生徒からの「先生、探究するってこういうことだよ!」という興奮した反応、ひょっとしたらこれが、ライオン蟻の論文の中で起こっていた出来事なのではないかと思いました。そして、なんとかこの感覚をもう一度味わいたい、数学の授業でこのような瞬間を持つことはできないだろうかと思うようになりました。

改めて『ライオン蟻に聞いてごらん』を読み直してみると、子どもが探究者になっていくためには、教師は教えるはいけないこと・その対象に子どもが自由に向き合う十分な時間と場所があること・教師自身もその対象に興味を持ち熱心に向き合うことなどを書いてあります。なるほど、紙飛行機の際はまさにその条件がそろっていました。数学の授業でもこの状況を作ればよいのですが、限られた時間の中で、教えねばならない内容が定められている教科の授業の中で実践するのは、なかなか困難を感じていました。私は、教

師が解き方を教えて「さあ、みなで同じように解きましょう」というのがあまり好きではなく、一つの題材を示し、生徒に自由に考えてもらい、みんなで対話しながら概念を獲得していくというスタイルで授業を組み立てるようにしているのですが、それでも「そろそろ、この概念にたどり着かねば」という方向性のコントロールが、紙飛行機のような生き生きとした空間になるのを邪魔しているようなのです。

そこで、私はコントロールを少し手放してみることにしました。オープンな題材を授業に取り入れてみることにしたのです。例えば『『星形五角形の5つの角の和は必ず 180° になる』ことを発展させて、新しい性質を見つけよう』というような題材です。この題材を示してしばらくすると、生徒たちはしんと静まり返り、それから黙々と試し始めました。途中「あっ！」と発見の声が上がって静寂が破れることはあっても、自分だけの発見を試みようとしてひたすら試しています。生徒たちの探究の方向性は様々でした。星形六角形・星形七角形..と発展させて規則性を見つけようとする生徒、5つの点を別の形に結んで結び方による和の違いを検証する生徒、そもそも星形は何角形でもできるのかを探究する生徒。何かを見つけた時の生徒はとても誇らしそうで、自分で見つけた性質なので、一生懸命それが正しいことを証明しようとします。生徒たちの発見の中には、私の知識を上回るものがいくつもあり、気づいたら私自身が生徒の発見に触発されて、夢中で探究をしていました。紙飛行機に近い場が、授業の中にもできていると実感した瞬間でした。

星形五角形の5つの角の和は、 180° になる



この星形五角形の題材の裏には「論理的に考察し、自分の考えを分かりやすく説明できるようになる」というねらいが潜んでいたわけですが、生徒がねらいに気づいていたかはわかりません。また、生徒の立場に立ってみると、星形五角形の角の和そのものは、将来の役に立ちません。それでも「何の役に立つの？」と言う生徒はいませんでした。そこにわかりやすい目的がなくとも、没入して探究したという体験そのものが学んでいるという実感につながり、学びに対する大きな満足を得ているように感じました。子どもというのは自分の頭で考えることそのものが好きなのだということが、よくわかりました。

ライオン蟻のわくわくを、いかに授業で得られるか。課題設定に失敗してうまくいかないことも多々ありますし、時間との兼ね合いはいつも悩みの種です。それでも、生徒たちのあの没入している顔にまた出会うべく、これからも地道に頑張りたいなあと考えています。

※会員専用ライブラリ『ヨス・エルストヘースト氏の論文』で読めます。まだ読んだことのない方はぜひ！

【実践報告】**「20の原則1・2 人間について」**

～教員の共通認識とし、クラスで実現していくための提案～
性教育を手掛かりにして

稲森理恵

ただいま子育て真っ最中、その合間に限界集落でイエナプラン教育を基にした小学生の居場所の運営と、岡山ユニセフ協会の事務局長をしています。教員の現場を離れ、寄与できることは限られていますが、また違った視点から提案できることはないかと考え、20の原則と性教育に焦点を当て、研究を行ないました。

今回、イエナプラン教員専門資格研修の研究内容（一部抜粋・改変）を、ニュースレターに掲載する機会をいただきました。皆様にとって、何かのヒントや手掛かりになれば幸いです。

**1. イントロダクション****1-1 テーマ選択の理由**

イエナプラン20の原則の1・2には、「どんな人もたった一人しかいない人」であり、「どの人も自分らしく成長していく権利を持って」いると書かれています。この原則は一見当たり前で簡単なことのように思えます。しかし、人権に関わるこの原則を、学校の中で、また社会全体で本当の意味で実現していくことは、非常に困難なことだと私には思えました。それは、子どもの幸福度の低さ（unicef レポートカード2020）やジェンダーギャップ指数が先進国で最低レベル（世界経済フォーラム「The Global Gender Gap Report 2021」）といった数値からも見て取れます。

また、そもそも日本では人権に関することを義務教育では十分に行っていない、完全に乗り遅れているという危機感を持ち続けていました。どのような人間観を持っているかということ、教師個人の心の在り方に負わせすぎているのではないかと思い、そのヒントを探すべく、このテーマを選択しました。

1-2 探求の問い

「20の原則1・2人間について」を教員の共通認識とし、深めるにはどうしたらいいのか？

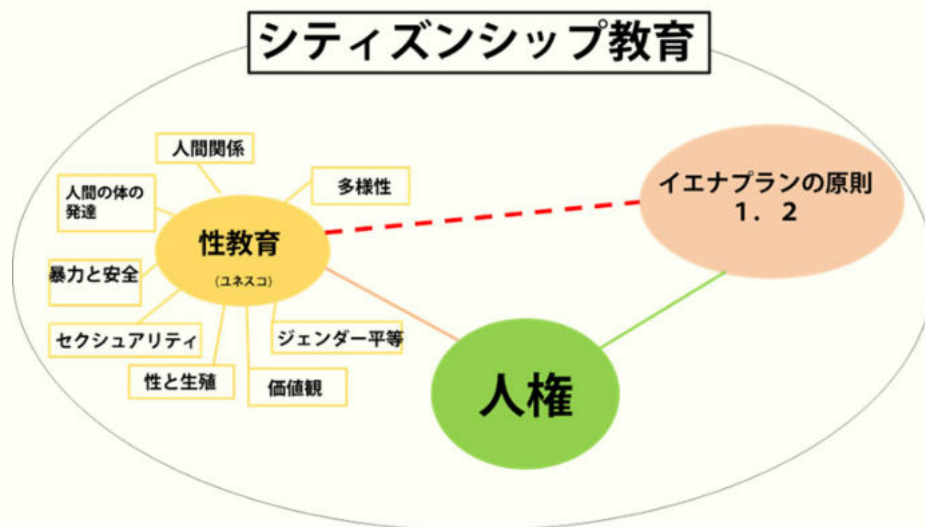
日本イエナプラン教育協会のホームページにある「20の原則 解題」によると、原則の1および2は、「すべての人間の生に対して抱くべき尊敬の態度の基礎」であり、「理屈として認めるだけでは十分ではない」とあります。このイエナプランの人間観の基礎である原則を、具体的に深めていくにはどうしたらいいのかという問いが、私の問いです。

そこで、私は以下のような仮説を立てました。

**仮説：人間の根本である心と体・人権への理解に、対話をベースにした性教育が
1つの手掛かりになるのではないか。**

なぜ対話をベースにした性教育を「学校」で行うのか、という理由の背景には、現在、日本で「おうち性教育」というのが一つのブームになっているということが挙げられます。それは、性に関する知識を家庭で子どもに伝えようというものです。しかしながら性教育には、生殖や成長に関わること以外にも様々な分野があります。例えば、人間関係、ジェンダー、価値観、多様性などです。こういった内容は決して「おうち」で完結するものではなく、学校のような場所で、他者との対話や関わりを通してしか理解できないものです。

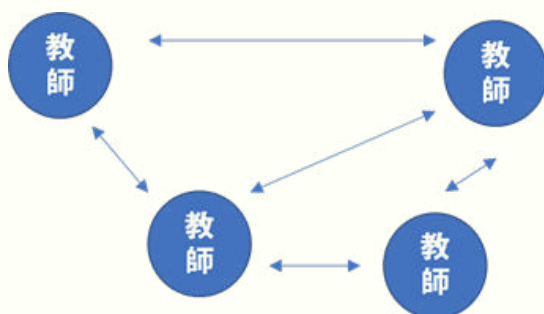
またユネスコの「国際セクシュアリティ教育ガイダンス」では、幼少期から学ぶべき性教育は多岐に渡り(図1参照)、すべての人に行われるべき人権教育の一つであると明記されています。イエナプランの「20の原則 人間について」もまさに人権に関わることであり、原則を理解するうえで性教育の一つの手掛かりがあるのではないかと仮定しました。



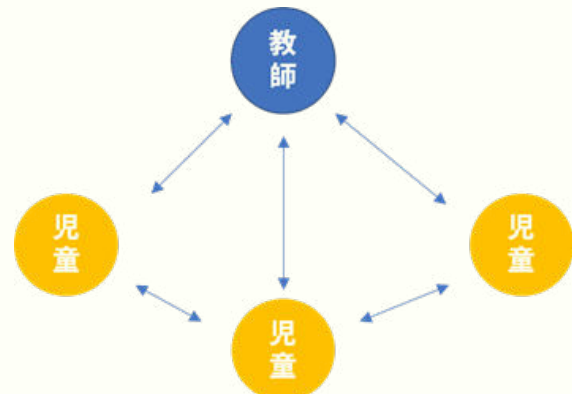
1-3 アプローチ方法

アプローチ方法は次の2つです。

- ① 教員間の共通認識を深めるために
→ 対話を重視した性教育ワークショップの開催



- ② クラスで実現していくために
→ 学習指導要領からの提案



2. アプローチその①「教員間の共通認識を深めるために」

2-1 対話型性教育ワークショップの開催

まず私は、3歳から小学校2年生の保護者向けに性教育のワークショップをおこないました。事前調査では以下のような意見が出ました。

<事前調査>

- ・小学校のPTAでも性教育の関心は高いが、学校が何を教えているのかわからないし、あてにならない気もしている。
- ・体のことに興味がある子どもたちに何をどんなふうに伝えたらいいか、わからずはぐらかしている
- ・話をする機会がない。学校で聞くイメージ。
- ・オープンに話をする機会がない。
- ・なんとなく、触れるのがタブーな内容。

またワークショップを行うにあたっては次のような場の工夫をおこないました。

<場の工夫>

- ①呼び名を変える。
- ②アイスブレイクをおこなう。
- ③質問形式のスライドを用意する。
- ④話した内容はこの場だけのものにする。
- ⑤参加者同士を関わらせる対話の工夫をする。

2-2 その結果と考察

<結果>

ワークショップ後の反応としては、以下のような意見が出されました。

Q. 子どもの発達にとって性教育はどのような影響があるか？という質問に対して

- ・体のことだけでなく、心の成長にも必要。
- ・自分自身と他人の心と体を大切にできる。
- ・対人関係にも影響しそう。

Q. 大人にとって性教育はどんな影響があると思うか？という質問に対して

- ・何でも話せる関係でいることが、お互いの心の安定になって、それが自分を大切にすることにつながった。
- ・話しているうちに、なぜこんな大事なことが話しにくい社会なのだ？と疑問に思えるほど、ハードルが下がった。話をするのが大切。

<考察>

- ①アイスブレイク（場作り）の重要性＝安心安全な場につながる。
- ②知識だけではない、対話を通じた性教育の必要性。
- ③対話を通して意見や経験を共有することが心理的な安心感につながる。
- ④話しづらかったことも話せる関係が築ける。

以上のことは、20の原則にある人間観を深め、また教員と子どもとの関係、教員同士の関係作りの手掛かりにもなると考えられます。また、参加者の意見にあった、「大事なことが話しにくい社会」を「大事なことが話しにくいクラス」に置き換えて考えることもできるのではないのでしょうか。

3. アプローチその2 「クラスで実現していくために」

3-1 先行研究紹介 大阪市立生野南小学校（2022年閉校）

性教育を通してイエナプラン教育の人間観をクラスでどう実現させていくかを考える上での一つの手掛かりとして、大阪市立生野南小学校の実践例を紹介します。

生野南小学校はかつて、子どもたちの暴力や暴言が飛び交う荒れた小学校でした。しかし、暴力ではなく、言葉で表現できる子どもたちを育てようと始めたのが「生」と「性」の教育です。人権教育的な取り組みと性教育とを合わせた「生きる教育」のプログラムを小学校6年間、中学校3年間で系統的に作成・実践し、効果を上げてきました。

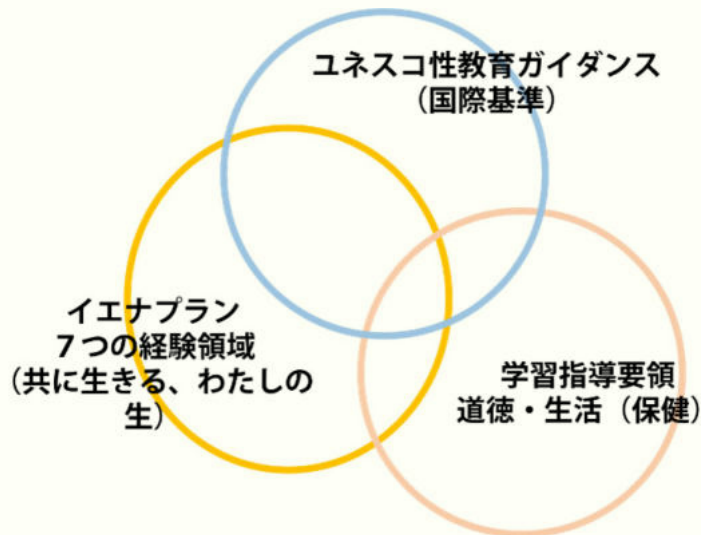
生野南小学校のような取り組みは全国でも数校見られますが、しかし、学校独自にカリキュラムを作成し、学校や保護者の同意を得て実践していくことは困難を極め、現実的にはすぐに取り掛かることが難しいものです。また性教育は、いわゆる「歯止め規定」と呼ばれるものがあり、ユネスコのガイダンスと比較しても十分な性教育をクラスで独自におこなうことはできません。

そこで、カリキュラムを作るのではなく、普通の学級活動や授業で何か取り入れられることはないだろうかと考え、学習指導要領を比較することにしました。

3-2 学習指導要領からの提案

ユネスコの国際基準である「国際セクシュアリティ教育ガイダンス」を元に、どのような内容が現在の学習指導要領ではカバーできているのかを一覧にしました（表は紙面上、割愛します）。また同様にイエナプラン7つの経験領域（共に生きる、わたしの生）についても同様に項目の比較をしました。

対象年齢・学年は、ユネスコのガイダンスで一番下の5～8歳を基準とし、学習指導要第1・2学年の道徳・保健体育・生活およびイエナプラン7つの経験領域（6～9歳）のコミュニケーション・共に生きる・わたしの生を比較項目としました。



表にしてあきらかになったことは、現在の学習指導要領では、性教育や20の原則にあるような人権に関する内容が非常に薄いということです。そこで、普段の教育活動で取り組めることとして以下の2つを提案します。

提案① 普段の教育活動において、多様性と広がりを意識すること

ユネスコ トピック	ユネスコ 性教育ガイダンス 5～8才	イエナプラン 7つの経験領域 6～9才	学習指導要領 道徳 1・2年 (6～8才)
友情	友情には さまざまな形 がある	友情と敵対というテーマについて 話したり、遊んだり する	友達と 仲良くし、助け合う こと

例えば、「友情」というテーマを見ると、ユネスコのガイダンスには「友情にはさまざまな形がある」と書かれています。これは必ずしも友情は良い形だけのものではない、悪い形もあるといったことを示唆しています。一方、イエナプランでは「友情と敵対というテーマについて話したり、遊んだりする」とあります。ユネスコとイエナプランには友情の多面的な面が含まれていますが、学習指導要領の「友達と仲良くし、助け合うこと」との間には大きな表記上の違いが汲み取れます。道徳の「徳目」とイエナプランの目指すシティズンシップの大きな違いがここに見られます。

そこで、こういった学習指導要領の「徳目」等に多様性の観点を足し、話し合う、遊ぶ、といった他者との協働を入れることで、20の原則のような人権意識を道徳にプラスすることを提案したいと思います。知識や正しいとされることを教え込むのではなく、対話から導くことの重要さは言うまでもありません。

提案② 人間の体と発達について話をする機会を多く持ち、学級活動や教科と関連付けること

提案の2つ目は、人間の体と発達について話をする機会を持つことです。「人間の体と発達」については小学校3・4年生の保健体育の範囲です。子どもたちは、生まれた時から自分の体に興味を持ち、3歳ごろには生殖や異性の体についても疑問を持つようになることを考えるとこれは非常に遅いと言わざるを得ません。小さい頃から自分と他者の心と体を大切にすることや、それを周りの人と話す機会を持つことで、恥ずかしいことではなく、当たり前のことと受け止められるようになります。また、そのような機会を、普段の学級活動や教科と関連付けて作ることもできるでしょう。

4. 結論

以上のような実践と研究を通して、「対話型性教育は、イエナプランの人間観の理解を深める手掛かりの一つとなりうる」という結論に至りました。あくまで手掛かりの一つ、としたのは、イエナプラン20の原則は性教育だけでなく、すべての教育活動を通しておこなわれるものだからです。クラスでの教育活動や教科活動につなげて活かすことで、20の原則をより深めることができると考えます。

そして、先のワークショップの参加者の言葉にあったように「なぜ（性教育のような）こんな大切なことが話しにくい社会なのだ」を変え、自分らしく生きられる環境やイエナプランを実践していくベースとなる温かなクラス作りにつなげていけたらと思います。

ペダゴジカル・シチュエーション

好奇心から始まる〈深い学び〉



川根本町立中川根第一小学校 濱 大輔

「イエナプランは（メソッドではなく）ビジョンである」

この言葉は多くの人を魅きつけ、相通じる志を持つ人たちが互いに手を取り合うように導いてきました。そして、オランダで展開されているイエナプラン実践という具体を参照しながらも、それぞれの状況でコンセプトをどう適用するか判断は各々の実践者に委ねられている、という望ましいバランスにも寄与してきたでしょう。私たち日本のイエナプランナーは、このような協働の姿勢やバランス感覚を、これからも努めて持ち続けていくべきだと思います。

他方、近年では、2021年に中教審が答申した「令和の日本型学校教育」というイエナプランと親和性の高い教育ビジョンなどに呼応して、その具現化としての実践が各所で試みられるようにもなりました。そのため、個別最適で協働的な学びを助ける教材や場の設定、子どもに与える単元進度表などの目に見えるカタチに触れる機会も増えてきたように思います。このように多様な取り組みが活気づくことは必要なことであり、私は一人の教員・市民として、これらの試行錯誤の先に、全体としての教育がよりインクルーシブな方向へと変容していくことを願っています。

さて、こうした変化を目の当たりにするにつれて、私は一方で次の問いに取り組む必要性をより強く感じていきました。

「私たち日本のイエナプランナーがまだ十分に手をつけられていないコンセプトや実践には何があるだろう？それはどのようなもので、今の学校現場にどう役立てられるだろう？」

オランダ・イエナプラン教育に学んだ日本の実践・研究は緒についた段階ですが、イエナプラン自体はペーターセンの実験学校が始まってからちょうど100年目を迎えました。この教育は100の町があれば、100の学校があるべきだと考える、多面的な価値類に根ざしています。同時に、100のうちのいずれにも価値の大きな知見が、先達の著述には無数に詰まっています。

今回は、その中でもペーターセンの中心テーマとされる「ペダゴジカル・シチュエーション」に関する記述を読み解き、そこに公立小学校におけるファミリー・グループワークの事例を重ねることで、今号のテーマ〈好奇心〉について掘り下げます。

本稿は、今後ますます本格的に発展する日本イエナプラン教育の、小さな一歩に過ぎません。私は、次号以降のニュースレター、その他の媒体を通じて、さらに多くのイエナプラン実践・研究が広く共有されていくことを、一人のイエナプランナーとして願っています。私たちのイエナプランを、一緒につくりましょう。

■イエナプランは「全体」

イエナプランナー—ドイツに生まれ、オランダで発展したこの教育が、遠くアジアの島国である日本の地で、多くの人を惹きつけているのは何故でしょう。

- ・この教育が普遍的なコンセプトを備えているから？
- ・子どもが自律的に学ぶブロックアワーが理にかなっているから？

- ・総合学習のモデルとしてワールドオリエンテーションの枠組みが優れているから？
- ・サークル対話で大切にされている価値観に共感するから？

恐らく、イエナプランを学んだほとんどの人は、このいずれにも一定頷きつつ、その理由を一つに絞ることはできないでしょう。何故なら、イエナプランは全てが有機的につながる「全体」であり、そのこと自体がこの教育の魅力を際立たせているはずだからです。しかし、この「全体」という概念の大きさは、イエナプランを理解することを難しくさせてもいるかもしれません。

「イエナプランをもっと学びたい。より深く理解したい。でも、どこから手をつけたら良いかわからない——」この教育が広く知られていくにつれて、そう感じる人も増えているようです。そんな時、週計画、リビングルームのレイアウト、ヤンセンの自転車といった視覚的に捉えやすいものは易しく、一定のニーズを満たすでしょう。しかし、実のところ、これらはどれもペーターセンが提唱したイエナプランという「全体」の中心テーマではありません——それが、ペダゴジカル・シチュエーションです。

■ペダゴジカル・シチュエーションとは何か

フェルトハウス & ウィンタース (2020) は、ペーターセンが提唱したこの概念を次のように説明しました。

ペダゴジカルシチュエーション (子ども学的状況) とは、ペダゴジカルな (子ども学的な) 意味づけに基づいて学習を企画するグループリーダーを、子どもたちがたくさんの問いを抱えて生き生きと取り囲んでおり、そのグループの中の 1 人 1 人の成員は全人格的存在としてアクティブに関わるように刺激され、導かれている、という状況を言います。^[1]

この説明を読んだ多くの人は、ひょっとすると次のような疑問を抱くかもしれません。

「それって、例えばどういう状況？」

「その状況は自然とできる？」

「その状況がどれだけ重要なの？」

次に、ペーターセンと先達の記述を読み解きつつ、これらの質問の一つずつについて記していきます。

■その状況がどれだけ重要な？

ペダゴジカル・シチュエーションは彼の指導論の全体を貫く概念です。この指導論を記した『Führungslehre des Unterrichts (授業の指導論/蘭題: Van didactiek naar onderwijspedagogiek)』で、彼は第 1 章の全てをこの概念の記述に費やし、これに続く章立てでも、この概念の定義・構造を全体的な骨組みとしています。私はこの本を読み、ペーターセンの pädagogische situation (ペダゴジカル・シチュエーション) の概念が大変難解であること、それがフェルトハウス & ウィンタースの説明よりも広い範囲を指すことを知りました。この著書の中で、

[1] 『イエナプラン 共に生きることを学ぶ学校』

フレック・フェルトハウス、ヒュバート・ウィンタース (著) リヒテルズ直子 (訳) 2020 ほんの木 p.172

この色分けは、ペーターセンによるこの概念の定義を成す 3 つの要素を基に、執筆者が行った。

『Führungslehre des Unterrichts』 Peter Petersen 第 5 版 1955 GEORG WESTERMANN VERLAG p.20 初版出版 1937

また『学校と授業の変革 (小さなイエナプラン)』第 1 章の解説において、三枝孝弘はそれぞれを「問題意識」「教育的意図」「全人格としての行動」とした。

ペーターセンはこの概念の重要性についてさまざまに述べていますが、私は現在の日本の教育状況においては、とりわけペダゴジカル・シチュエーションと〈深い学び〉との関係性に大きな意義があると考えました。彼はこの状況を用いることで、「精神生活の源泉」^[2]から直接引き出される、より〈深い学び〉を生み出せると考え、その反対に、ヘルバルトのいう経験と交際を欠いた教育を「あたかも太陽の光を欠いて、ローソクの光で満足するようなもの」^[3]だとしました。オランダ・イエナプラン教育の若き指導者であり、私にイエナプランを伝えてくれた一人でもあるヒド・ハウヘは、これらを踏まえて次のように記しています。

「イエナプラン教育では、『本当に心に響くものがあったときに、最も多くを学ぶことができる』と確信しています。」^[4]この言葉に触れた時、私は2017年の3ヶ月研修で、彼と過ごした印象的な1日のことを思い出しました。

この日、彼は私たち研修生を、おもむろに研修施設 Het Bovenveen 内の駐車場へと誘いました。そこには彼の車があり、私たちは促されるままにトランクを開けました。すると、そこに大きなドラムセットを見つけました！



私たちはたちまちこれに魅了されてしまいました。そして、これを自分たちの力で研修施設のリビングに移しました。ヒドは組み立て方を示しませんでした。そこで、私たちはまず自分たちの勘を頼りに組み立てることにし、その後インターネットも使ってあれこれと試み……見事、組み立てに成功。その後、彼に指示されるでもなく、自ずからこれを叩き始め…ワクワク（緊張）が高まり、仲間の一人がヒドに一曲やって欲しいとリクエストした時、彼は私たちにこう提案しました。「みんなで一つの曲をつくろう」

そこから、私たちのエネルギーはあっという間に高まりました。自前の楽器（ウクレレ・ギター）を持ち出したり、ドラムを数人で叩いたり、瓶に息を吹き込んで音を鳴らしたり、コップにさまざまな量の水を淹れて音階をつくったり…。みんな子どもみたいに楽しみました。

最後は、ヒドがたまたま居合わせた施設への訪問客とヒュバートを観客として招き、私たち 10 minutes band は彼らの前で「カントリーロード」を披露したのです。私はその時、仲間たちとの強い心の響き合いを感じました。そして、〈人間の学校〉ではこうして共に生きることを学ぶことができ、この時のヒドの過不足のない関わりをペダゴジカル・シチュエーションを用いることだ、と理解しました。

上記のエピソード記述は、私自身の個人的な経験と解釈に基づくものであり、当然ながら全ての時代・国におけるペダゴジカル・シチュエーション概念を語り得るものではありません。しかし、現代日本における理想的なイエナプランスクールを考える上で、このエピソードとそこから引き出され得るペダゴジカル・シチュエーション概念は欠かせないものだ、と私は考えます。

■その状況は自然とできる？

私たちは「状況」という言葉を一般的に用いています。また、日本で子ども中心の教育について語る人たちは、これに近いものとして「環境」という言葉をよく使います。これらを踏まえると、私はペダゴジカル・シチュエーション（子ども学的状況）が、一部で次のように解釈される可能性があると感じています。

[2] 『Führungslehre des Unterrichts』(p.13)にてペーターセンがヘルバルトの記述を引用。日本語訳の出典は下記『一般教育学(世界教育学選集;第13)』ヘルバルト著,三枝孝弘訳 明治図書出版 1960 p.81

[3] 同上

[4] MENSENKINDREN 第33巻 159号 2017年12月号 'Stamgoepleider, ik daag je uit! Over diep leren vanuit de pedagogische situatie' Guido Huige p.43 日本語訳はオランダ在住の武田昌子さんに確認して頂いた。

「つまり、子どもの育ちにとってよい環境を整えるのが私たち（大人）の役割で、そこから何をどう学ぶかは子どもたち次第だということだ」

「子どもの発達につながる状況は、そうした環境づくりによって自ずと生まれてくるものであり、私たち（大人）がコントロールできるものではない」

あなたは、これらの考えをどう受け止めたでしょうか—— 少なくとも学校の教育者（養育者）としての私は、いずれも部分的に、一定賛同するに留まりました。それはペーターセンにしても同じだったことでしょう。イエナプランは自由放任ではなく、グループリーダーは目の前の子どもとその時の状況を鋭敏に感じ取りながら、グループを思慮深く導くことが大切です。確かに、子どもの発達において望ましい状況が偶然に生じることはあるでしょう。また、そのような偶然が頻繁に起こるような共同体が、理想的な学校共同体であるともいえます。しかし、イエナプランにおいては、その状況が子どもの全人的な発達を一層刺激するものとして、グループリーダーに意識的に用いられることが大きく期待されてもいるのです。

■それって、例えばどういう状況？

以下は、私が現在（2022年度）担任している公立小学校の複式学級（2,3年生：14名＋担任教員2名）で今も進行中のワールドオリエンテーション（ファミリー・グループワーク）の様子です。

ある月曜日、宿題の読書カード^[5]の家庭からのコメント欄に、2年生の聖菜ちゃんのお母さんからこんな書き込みがありました。

「この土日は、お兄ちゃんと一緒に点字で手紙を書き、（目の見えない）お祖父ちゃんに届けました」

一緒に担任をしている真子先生は、このコメントを読むと「これ、すごくないですか？」と言って、すぐに私に見せてくれました。私たちは「この点字を打つ道具を、学校に持ってきてもらおう」という考えで一致し、読書カードにお願いの返事を書きました。

後日、聖菜ちゃんは（国語・算数を主とした）ブロックアワーの時間に、持ってきた道具を取り出しました。彼



この写真は、前日に同じ点字機をクラスの約半数の子たちに見せた時のもの

女は友達の美希佳ちゃんを誘って、厚紙に点字を打ち始めました。^[6]しばらくすると、3年生の陽子ちゃんも興味津々とばかりにやってきて、聖菜ちゃんに打ち方を教わり始めました。この様子を見ていた私は、ブロックアワーの終わりの時間に、この道具（点字機）をみんなで観察しよう決めました。^[7]ウクレレの音でサークルになる合図を送り、全員が集まると、私は

[5] 毎日、自分が選んだ本を読み、タイトル・読んだページ・作者名・評価を記録する。

[6] この教室のブロックアワーでは、このように「子どもたちが何か主体性を生かして活動するゆとり」が与えられている。『イエナプラン 共に生きることを学ぶ学校』p.40

[7] このように（小さな）時事を教育に組み込むことができる一つの理由は、グループリーダーが日々の教育的な生活において、探求学習を企画組織するための適切な枠組みを事前に持っていることにある。〈ヤンセンの自転車〉はそのために役立つツールである。『イエナプラン 共に生きることを学ぶ学校』p.101

また、これ以降に記したファミリーグループワークの学習過程は、主として〈ヤンセンの自転車〉に従っているが、「第5ステップ 発表する」以降については、本報告の段階では十分に扱えていない。

「その袋の中のもの、みんなに見せてくれる？」と聖菜ちゃんを促しました。彼女は、再び点字機を取り出しました。周囲から「どうやって使うの？」という質問が出されると、点字の見本を見ながら（せいな・なつき）などと、自分と友達の名前を打ちました。私が名前の書かれた厚紙を順番に手渡しするよう促すと、子どもたちの問いは自ずと膨らんでいきました。

「なんて書いてあるの？」「せいな、なつき、って書いたんだよ」「へえ～」「なんで（目の見えない人は）これで書いてあることがわかるんだろう？」「（聖菜ちゃんの持ってきた点字の文集を見て）うわ、分厚っ！」「絵本とかもあるのかな？」

ひとしきり経った後、私はこう伝えました。

「今週から、週計画に『探求』っていう課題を入れていたと思うんだけど、そこでやりたいと思っていたことの入り口は、こういうことなんだ。自分たちの身の回りにあるものを、『不思議だな、何でだろう』と思って見てみること。そうやって、たくさんの『はてな』を思いつくことができると、そこからたくさんのことが学べるでしょ？ 皆は、これを見て、どんな質問を思いつくかな？」

こうして、このクラスの探求学習は始まりました。各自の問いをマインドマップに書き出し、それをクラス全体のマップにまとめました。これを基に役割分担をした後、私は、以前紹介してあった[一次情報]と[二次情報]の区別について確かめた上で、こう尋ねました。

「みんなが選んだ質問に対する答えを、どうしたら得られるだろう？」

すると、

「聖菜ちゃんのお祖父ちゃんに会えたら一番いいと思う」「電話でお願いしてみたらいいんじゃない？」「手紙もあった方がいいよ」

と子どもたち。そこで、聖菜ちゃんのおうちにみんなで電話をし（スピーカーフォン使用）、お願いの手紙を届け、返事を待った結果……お祖父ちゃん（近藤さん）が学校を訪ねてくれることになりました！

近藤さんが学校に来てくれた日、私たちは一緒にサークルになって、たくさんの質問をしました。近藤さんは、普段使っている道具をいくつも見せ、自身の生活のことやこれまでの人生について語ってくれました。また、同行した聖菜ちゃんのお母さんは、父である近藤さんとの暮らしから学んだことを話してくれました。ある子が「目の見えない人はどうやって歩くんですか」と尋ねました。近藤さんが少し困った様子だったので、私は「それは実際に見せていただくのが一番だね」と言い、近藤さんを駐車場まで見送ることを提案しました。道すがら、子どもたちは「そこ、段差あります！」などと言いながら、みんなで近藤さんの側について歩きました。「バイバーイ！」近藤さんに手を振った後、教室に戻るまでの道を、何人かの子は目を瞑って歩いていきました。

さて、ここまでの間に、私たちには本当に心に響くものがいくつもあったように思います（太陽の光）。そして、ここから先の探求学習もほとんど自ずと発展していったのですが、このプロセスにおいて、私がいつも念頭に置いていたのは、次の問いでした。

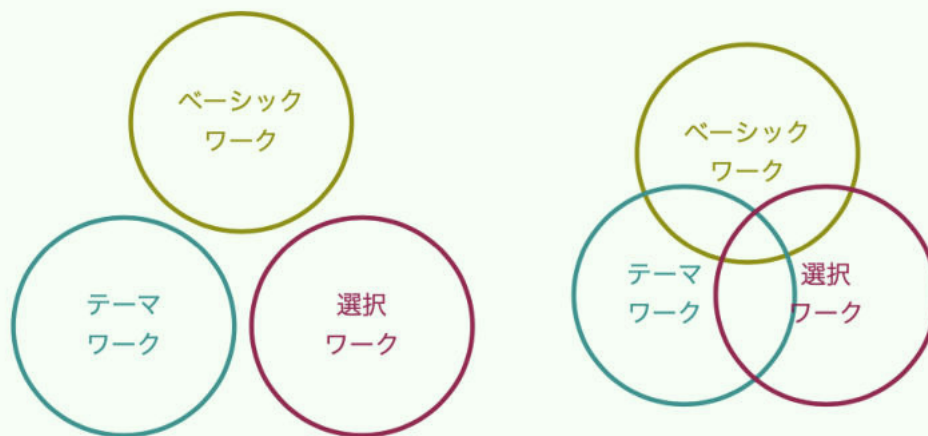
- 目の前の状況は、子どもたちの生と発達にとってどのように意味のあるものになり得るか？
（あるいは、意図的に意味のある状況を生み出し、子どもたちをそこに引き込む必要があるのか？）
- その意味を最大化するために、わたしは何をする（しない）べきか？
ex) 問いかける、刺激する、一緒に計画する、組織する、指導する、環境を整える、
その場を離れる etc.

後日、聖菜ちゃんのお母さんに手紙を頂き、盲導犬と点字ブロックについて教えてもらいました。すると、「盲導犬に会いたい！」と子どもたち。「どうしたら会えるか考えてみよう」「もし会えたらどんなことを知りたい？」と私。話し合い、盲導犬に会える方法をインターネットで探しました。

「富士ハーネスっていう施設に行けば会えるかもしれない！」「でも、2時間半くらいかかるみたい」「行けるかな？」「施設に電話してみよう」「校長先生に相談してみよう」「スクールバスは使えるかな」「バスの利用申請書を書こう」

そんな中、一部の子どもたちは点字ブロックの探求も始めることに。まずはブロックを探しに校外へ。^[8] なかなか見つかりませんでした……ありました！ 農協の前の、銀行？（ATM）自力で発見して、喜びもひとしおです。さあ、今度は点字ブロックに関する質問を書き出して…。

点字ブロックを見つけた子どもたちは、気がついた時には、点の数を数えていました。縦が5、横が5だから、 $5 \times 5 = 25$ （算数のかけ算の活用）。毎週のブロックアワーの課題には「読書」が含まれています。ここでは、点字や障害、盲導犬など、テーマに関連する本を選ぶこともできます。私は、これらの本を図書室から数冊選び出し、リビングルームに置きました。ブロックアワーの時間にそれを読む子もいました。他の本を自分で探してくる子もいましたし、もちろん、それを読まない子もいました。この学習の様子は、子どもが作る学校新聞（これもブロックアワーの課題）に掲載され、保護者と教職員に伝えられました。このようにして、ペダゴジカル・シチュエーションを用いて子どもの内発的動機付けを高め、その仕事が最近接領域（自分1人でできることのすぐ次の発達領域：ヴィゴツキーの用語）^[9]の発達に向けたものになるよう過不足なく関わり続けることで、子どもたちはますますグループの相互作用を生かして自律的に学ぶようになっていきました。そして、私はグループリーダーとしての役割の重心を、徐々に指導者からファシリテーターへと移すことができました。^[10] また、3種類のワーク（テーマワーク・ベーシックワーク・選択ワーク）を徐々に統合させ、グループの学びをよりイエナプランらしい方向へと進展させることができました。^[11]



- ベーシックワーク（中核目標と学校が独自に設定している目標：子どもたちができる限り到達すべきだと私たち教員が考えている目標）
- テーマワーク（ファミリー・グループワーク、小さな時事や大きな時事から始まる学習）
- 選択ワーク（子どもたち自身が選んだ学習目標）

■ファミリー・グループワークと学習指導要領

フェルトハウス & ウィンターズ（2020）は、「ペダゴジカル・シチュエーションとはファミリー・グループワークを実施している状況のことです。」^[12]と記し、その意味する範囲を限定的に示しました。本稿ではこれを踏まえ、点字機の学習を小さな時事を用いたファミリー・グループワークの一例として報告しました。

[8] 教員側の事前の調べでどこにあるのかはわかっていたが、今回は敢えて子どもたちが道順を決めて探すことにした。

[9] イエナプラン 共に生きることを学ぶ学校』p.32

[10] MENSENKINDREN 第33巻 159号 2017年12月号 'Stamgoepleider, ik daag je uit! Over diep leren vanuit de pedagogische situatie' Guido Huige p.43

[11] 3種類のワークの図とそれぞれの説明は『イエナプラン 共に生きることを学ぶ学校』p.113,114より抜粋・引用。

中核目標は日本の学習指導要領に当たるものだが、その内実は大きく異なる。

[12] 『イエナプラン 共に生きることを学ぶ学校』p.173

日本では、2020年度からの学習指導要領改訂を中心とした教育界の潮流として、従来よく行われてきた [1 単位時間あたり] の計画に基づく授業づくりから、[1 単元あたり] の計画に基づく授業づくりへの移行が推奨されてきたように思います。そこには、学習指導要領に掲げられた 2 大キーワード^[13] とそれらに連なる新しい授業のイメージが影響していたでしょう。

●主体的・対話的で深い学び

→ 予め子どもと単元計画を共有しておくことで、
一定期間の学習の見通しを持つことができるようにする (A)

●カリキュラム・マネジメント

→ 各教科等の学習内容を教師が予め把握し、その重なりや繋がりを事前に単元計画に
組み込んでおく (B)

他方、イエナプラン（特にファミリー・グループワーク）は、時事を教育に組み込もうとします。この場合、私たちは 1 週間、1 ヶ月先に起こることを予め定めておくことはできません。もっと言えば、ある日、たまたま鳥が窓にぶつかって気絶するようなことがあったら、わたしたちはその瞬間から、予定していた計画を一旦白紙にすることもできます。いや、子どもたちは既に鳥に駆け寄っているかもしれません。まずは鳥の無事を確かめるでしょう。ひょっとしたら手当てをしてあげる必要があるかもしれません。もし、この鳥がちょっとの間気絶しているだけで、そっとしておけば無事に飛び立てるようであれば？（一安心）それまでの間、この鳥を間近で観察させてもらうのはどうでしょう（「ちょっと君のことを見させてもらってもいいかな」と語りかけながら）。クラスはこれをキッカケに、気絶した鳥についての問いを基にした探求学習を始めることもできます。^[14] なお、この学習と学習指導要領の 2 つのキーワードとの関係性を次のように例示できることから、ファミリー・グループワークは現行の学習指導要領を含み超えるものと言えます。

科学的探究のプロセス（ヤンセンの自転車）によって、時事を取り込むことと学習の見通しを持つことを両立させることができる (A')

→ ●主体的・対話的で深い学び

子どもたち自身の問いと必要に応じて追加する教師の問いを集めて互いに関連づけ（例えば、マインドマップ化）、探究の課題とすることで、テーマに関する各教科書等の学習内容の重なり・繋がりを生み出したり、教科の枠を超えたホンモノの学びに取り組んだりすることができる (B')

→ ●カリキュラム・マネジメント

このように、ファミリー・グループワークは生きた学びであり、事前の計画よりも遥かにグループの関心（好奇心）を中心としますが、にもかかわらず（だからこそ）本当に心が響き合うような学びを通して、国が定めたよりも多くの目標を達成し得るのです。

[13] 「小学校学習指導要領（平成 29 年告示）」文部科学省

[14] 気絶した鳥の例はわたしの担任する学級で起こった実話をもとにしているが、この鳥は実際には少しの時間で意識を取り戻したため、観察する間もなく、窓の外へ飛び去っていった。また、ケース・ボットは著書「Jenaplan 21」の第 7 章 Het leerplan verder beschreven（カリキュラムは、さらに）の冒頭で David Hawkins が記したエッセイ「The Bird in the Window」の内容を紹介しており、本稿の気絶した鳥に関する箇所は、これらの内容からもインスピレーションを得て書かれたものである。

「Jenaplan 21: Een concept voor Jenaplanbasisonderwijs」 Kees Both 1997 p.117

「The Informed Vision: Essays on Learning and Human Nature」 David Hawkins 1974 p.93-94

■心が響き合う学びを生み出すツール

私たちは、この鳥や点字機の例のように、いつも外から持ち込まれたものを都合よく用いることができる訳ではありません。ですから、時には子どもたちの興味を引き出すために、グループリーダーが何かを教室に（ちょっと演じながら）持ち込むこともあります。例えば、子どもたちがそれまではあまり関心を寄せていなかった柿の樹から、熟れた実を取ってきて、これをかじりながら何食わぬ顔で教室に入っていかどうか……。これもファミリー・グループワークの入り口になり得ます。このようなファミリー・グループワークの種（テーマ）は、子どもとグループリーダーが共に好奇心をもっているクラス（グループ）において、最も頻繁に発見できるでしょう。そして、グループ全員がその種に目を見開くような関心を寄せ続けていくなら、そこから始まる学びは自ずと仲間と共に心を弾ませたり、揺り動かしたりするものになるでしょう。つまり、私はペダゴジカル・シチュエーションを、グループリーダーが本当に心が響き合う学びを引き出すためのツールでもあると考えています。それはちょうど虫眼鏡を使って火を起こすようなことかもしれません。グループの関心（太陽の光）を一点に集め、火種に煙が立ったところで必要なだけ息を吹きかける——（ちょうど、ヒドが私たちに「みんなで一つの曲をつくらう」と投げかけた時のように）。ちょっとだけコツが要りますが、きっと出来るはずですよ。



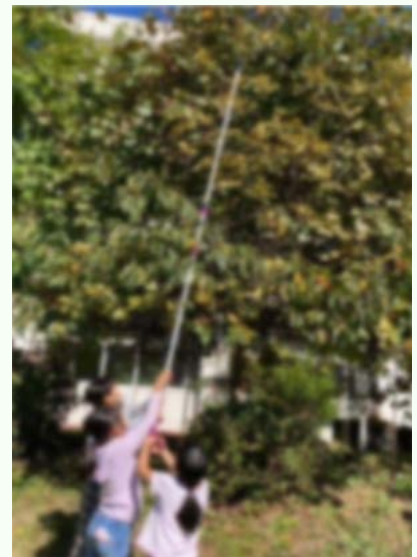
■好奇心の育つ土壌を耕す

『沈黙の春』で知られるレイチェル・カーソンは、彼女の遺作となった『センス・オブ・ワンダー』で、次のように述べています。

わたしは、子どもにとっても、どのようにして子どもを教育すべきか頭をなやませている親にとっても、「知る」ことは「感じる」ことの半分も重要ではないと固く信じています。

子どもたちがである事実のひとつひとつが、やがて知識や知恵を生み出す種子だとしたら、さまざまな情緒やゆたかな感受性は、この種子をはぐくむ肥沃な土壌です。幼い子ども時代は、この土壌を耕すときです。^[15]

わたしはカーソンのこの言葉に共振します。Feel more! 私たちも耕しましょう。そして、学校で、本当に心が響き合うような日々を過ごしましょう。



[15] 『センス・オブ・ワンダー（新潮文庫）』レイチェル・カーソン 著 上遠恵子 訳 川内倫子 写真 新潮社 p.36

コーナー

理事同期座談会

5月で任期を終える4人の理事に聞いてみました！

本来は直接お会いして座談会方式でざくばらんに話を聞きたかったのですが、皆さん住んでいる地域がバラバラなこともあり、今回は2月7日夜9時よりオンラインにて実施しました。ですが協会の理事事務局会など話し合いは基本的にいつもオンラインのため皆さん普段と変わった様子もなくゆるやかに話が始まりました。

いや～長かったような短かったような…。



Q：4年の任期も残り3ヶ月ほどになりましたが、そもそも皆さんはなぜ理事になったのでしょうか？

山ノ井：私は協会の仕事が手伝いたくて事務局でも良かったのだけど、ちょうど理事募集のタイミングだったので手を挙げてみました。

土岐：僕も似ているかな～元々全国大会など手伝ったりはしていて、もうちょっと手伝えたらいいなとも思っていました。あと、選挙は立候補が多い方がいいかな？という気持ちもあって。

若杉：僕はちょうど教員を辞めたタイミングだったな～。なんかこれから新しいことやろうっていう時がちょうど理事選挙で、チャレンジしてみようという感じだったんだよね。

川崎：私もなんかタイミング的にオランダで資格を取得した後だったこともあって、もっといっぱい協会に関わりたいなーって思ったんですよね。

皆さん自分の人生のタイミングと理事選挙が重なったこと、協会に関わりたい、力になりたいという気持ちが理事になるきっかけだったんですね。

Q：理事の期間を振り返って今どんな気持ちですか？全体を振り返って。

最初のうちは今まで前理事が行ってきたことをきちんと受け継がなきゃ、仕事をこなさなきゃ！という思いが強かったな～。

最初の2年と後半の2年ではコミットメントが変わるかな。責任とか…いろんなことを対応しないといけない。責任の伴う自由が生まれたのは最後の2年かな。

元々民主主義的な組織ということで選挙があって人が入れ替わるので理事のメンバーも入れ替わる分、たくさん対話を重ねて、組織として良い塩梅ができるのに半年から1年くらいかかるよね。

ファミリーグループの発想でちょっとずつ変わるみたいなことを実現してるんですかね私たち？

そうなると、もしかして3世代で変わっていくことが実現できたら面白い？より良くなるのかな？

確かに、3世代にしたら面白いかも。でも任期が6年は長いかな…かと言って3年も毎年選挙になっちゃうしね～。被る部分もあったからこそ受け継ぐところ、大切にしたいこともあるよね！

同期のメンバーが共同体で、誰か困っていたら手伝おうという切り分けられない関係性がとても良かったよね。大変なことが次々起こったので培われたものかもしれないけど笑

ただやっぱり、この前実際に隣にいてくれたことでスムーズに相談できたことがあって、対面ってめっちゃ良いなと思った。これまで自分が受け止めて抱えることがあったので、すぐに確認や相談ができる関係って良いなって。コロナの影響もあって中々会えない2年間が続いたけど、やっぱり雑談って大事だよね。1対1の関係でzoomで

も良いかもしれないけど、遊びに行くとか、お泊まりっこするとか組織づくりとしてしたら面白いかも！
最近、業務が細分化されて局所的に会えていることが増えていると思う。一緒に作業するって良いよね！

時代の変化

同時に時代が変わってきていることも影響を受けるよね。文科省が提示する内容も変わってきている。文科省の政策に影響を与えた説もあるけど、教育委員会レベルからの研修、大日向・常石ができたこともあり、そんな中で協会ってどうあるべきなんだろう？という問いはこの2年間持ち続けている。

特に切り替わりの時2年前名古屋事業や、日本国内での資格取得研修も始まりバタバタだった。やれるのか不安だったけど、落ち着いてきたよね。

後半の2年間について

初期メンバーが誰もいなくなる初めての経験でもあったしね。そんな中で代表理事の土岐さんの存在は大きかったな。

同期会を開こうと言ったのも土岐さんだし、全体を見ながら上手く環境整備してってくれた感じがする。最初の頃は、全てのミーティングに参加してくれていたしね。ずっと久保さんがやってきた部分を大変だったと思うけどより良くするために考えて動いてくれていた。

主体的にやりたくて手を上げた人なんだから、選んでもらっているし代表理事になることも覚悟しないと思っていたよ。

色々業務はあって、どちらかというと理事がキラキラして見える。けど、事務局と理事を両方やっていることで泥臭いことやっているからこそ、一緒に解決していった。みんな仕事しながらだから大変なことも多かったけど一緒に遅くまでMTしたよねっていう思い出あるよね。なんだかんだ楽しかった。

次の理事も楽しみだね！

そして、私たちはどういうふうこれから協会に関わっていくのかな～

この4年、ずーとイエナプランだったな。まだ想像はつかないけどそんなに離れちゃうってことはないだろうなと思う。

研究部へ行きたい！

理事が終わったらみんなで研究部はあり！

ははは！！

インタビューをしながら私もこのメンバーと協会を通して関わったひとりだと思えば嬉しさと同時に不思議な感覚になりました。間違いなく言えることは、これからも「イエナプラン」というキーワードで繋がり、学び合える仲間であること。インタビューありがとうございました！



インタビュー・記事

協会理事 石井

【研究報告】

2022 オランダ・イエナプランオリエンテーション研修報告（9月18日～23日） 「心あたたまる5日間」

青森県八戸市在住 中学校勤務（教頭） 吹越文代

何の迷いもなく自然な流れのように本研修参加、つまりオランダ行きを決めました。感想は、「行って良かった！」という言葉に尽きます。知的好奇心とあたたかい気持ちの詰まった5日間となりました。

研修はイエナプランで大切にしている「本物からの学び」「協働的な学び」「グループリーダーの関わり」を体験する型で進められました。テーマについて考え、伝え、仲間の考えを聞き、助言を得て、また考えるの繰り返し。ワクワクが連続しているうちに、時間が過ぎました。本研修には事前に大きなテーマが与えられ、最終日はグループでの発表がありました。夕食後などの余暇の時間も使って打合せをするようになり、そのテーマは与えられたものから自分たちの課題となっていたように思います。また、視察させていただいた2校のイエナプランスクールからは、寛容であたたかい雰囲気の中にも、人と人が学び合う場としての威厳を感じました。

何を言っても受け入れてくれる安心感に包まれ、興味深い考えが行き交う学びの時間は心地よく、それがイエナプランなのだと思います。子どもたちの毎日がこのような時間となることを願わずにはられません。

一緒に学んだ18名の仲間、講師の先生方、通訳のみなさん、視察を受け入れてくださった学校関係者のみなさんは、優しくてしなやかな強さをもつ方々ばかりで、イエナプランで結ばれた出会いから受けた影響は大きく、人生の財産となりました。「学校は安心安全で幸せな気持ちで通うところ」視察した学校の校長先生がおっしゃっていました。まさにそんな気持ちで過ごした幸せな5日間となったことをご報告いたします。最後に、道しるべとして私たちを導いてくださっているリヒテルズ直子さんをはじめ、ご支援してくださった協会の皆様に心からお礼申し上げます。ありがとうございました。



2022年度 専門教員資格認定研修 終了報告

石井七実

1月の28・29日の2日間東京にて最後の資格取得研修が対面で行われました。受講生の皆さんが約1年間学びながら実践してきたことが詰まった発表が多く、理事一同これから一緒に実践の輪を広げられること嬉しく思っています。

今年の研修は4回対面で実施することができ、アクリル板はあったものの共にご飯を食べたり、同じ空間でワールドオリエンテーションを経験したり、エンディングパーティーも行い「遊び」「仕事」「対話」「催し」の時間を共有しながら過ごしました。

研修の全過程を終えた受講生からの声として、

- ・人と対話しながら、関係をつくりながら、一緒に学ぶことの楽しさ。こういう学びの経験を子どもにもしてほしいなと思いました。
- ・一番印象的だったのは、最初のころに聞いたイエナプランの歴史の話で、昔（違う時代に生きた人）にも同じように子どものことをまっすぐに思い、全力を尽くして教育を切り拓いてきたということでした。いつの時代だって、同じ思いを共に歩む仲間がいるということです！
- ・学びがたくさんありすぎて悩みますが「共に生きる」ことが一番の学びだったと思います。研修を受ける中で、自分の生き方も考え直す機会がたくさんあり、子どもたちに共に生きることを伝えていければ、自分自身も他の人と共に生きていく素地をしっかりと作っていきたいと考えています。

などのコメントをいただきました。

※最終日のアンケートより抜粋

受講生の皆さん、約1年間お疲れ様でした。皆さんの中ですでに自主サークルもできていることを嬉しく思います。これからも受講生同士が時には振り返り、困った時には相談できる仲間となっていたら幸いです。

受講生の皆さんの研修と研究が詰まったレポートは今後基本的には会員ライブラリーに掲載される予定です。会員の皆さま、楽しみにしててください。学び続ける仲間として、ニュースレターを読んでいる皆さま同士も様々な形で繋がっていかれたらと思っています。



【活動報告】

岐阜県山県市 議員さん勉強会

若杉 逸平

2022年11月2日（水）午後、岐阜県山県市の市役所内にある議会事務局にて、山県市の議員さんたちの勉強会が開催され、研修講師として登壇するご縁をいただきました。きっかけは、同年9月10日（土）に岐阜県図書館にて開催された「先生のためのイエナプラン勉強会～『イエナプランのエッセンス』を取り入れた則武小学校の挑戦～」に、山県市議会議員を勤めておられる加藤裕章さんが参加されたことでした。私は講師兼ファシリテーターとして勉強会に関わっており、会が終了してから加藤さんから山県市の学校教育などについてお話しを伺うことができました。



山県市では教育委員会がイエナプラン教育の考え方を取り入れた異年齢での学校教育を進めようとしていて、11月には議員研修で広島県福山市にある福山市立常石とともに学園へ視察研修に行くことが決まっているとのことでした。そのため、視察研修へ向かう前にイエナプラン教育についての勉強会を議員有志で開催したいと考え、その勉強会で講師をお願いしたいとのことでした。勉強会は若手の議員さん4人が発起人となり、異年齢での学校教育や子ども主体の学習のあり方を学びたいとのことでした。勉強会当日は、10名の議員さんたちだけでなく、山県市の職員の方も数名参加されました。私からはイエナプラン教育についての基礎知識として、20の原則などのコンセプトについて対話的に学ぶ機会を提供したり、私がオランダのイエナプランスクールで撮影した学校の様子を動画で見させていただくなどしました。20の原則を読み、感じたことや考えたことなどを議員さん同士がグループになり対話した後に共有するなどして、



学校教育の役割や学校教育で大切にしたいことをじっくりと考える時間になりました。今回報告させていただいた議員さんたちの勉強会、そして常石とともに学園での視察研修を終え、今後山県市では、異年齢での学校教育についてのプラン検討を進めていかれるそうです。今回のご縁に感謝して、これからも山県市の皆さんとゆるやかにつながっていきたいと思います。

研究部活動報告

山地芽衣

日本の学校・国等におけるイエナプラン教育実践の発展・推進のための研究及びアウトプットを目的として2022年6月に発足した研究部。18人の研究部員でスタートを切ってから半年、各研究グループに分かれての活動が始まりました。これに加え、定例会やまるまる会といったオンラインでの集まりも開催しています。今回は、これら研究部の活動についてご紹介します。

【研究部グループ1：学習指導要領×ブロックアワー / ワールドオリエンテーション】

学習指導要領×ブロックアワー / ワールドオリエンテーショングループは、日本の学習指導要領の全ての項目について、ブロックアワーやワールドオリエンテーションにおいてどのように扱うことができるかを可視化し、そのために必要なツール等を開発することに主に取り組んでいます。これらを通して、日本の小学校教育においてもイエナプランの実践が可能であることを示すとともに、その発展に寄与したいと考えています。加えて、学習指導要領を網羅できること以上に、意味のある学びの実現が可能であることを示すことも、重要な目的です。

この研究活動によって達成したい中期的目標は、イエナプラン教育のコンセプトに共鳴し、ブロックアワーやワールドオリエンテーション等といった実践をする学校・教員を増やしていくことです。同時に、国の現在の教育制度に対して、イエナプラン教育の考え方を影響させていくことも、長期的なねらいです。

この研究グループでは、この中・長期的ゴールに辿り着けるよう、複数人の目を通しながら慎重に検討し、整理しています。これまで、活動の柱を学習指導要領×ブロックアワーと学習指導要領×ワールドオリエンテーションに分けて取り組んできました。

ブロックアワーについては、イエナプラン教育のコンセプトを用いた実践とはどういったものなのか、そのイメージを研究部員間で共通認識として持つことが最初の一步となりました。その後、2022年年末までにオランダの生きた言語教育のための指導書 DAT plus の内容を確認。2023年1月現在では、ミーティングを行いながら作業を進めていっています。

ワールドオリエンテーションについては、現在はまだ取り組まれていません。ブロックアワーの方と同様に、実践のイメージを共有することから始めていくことになりそうです。

【研究グループ2：幼児教育】

もう1つの研究グループは幼児教育グループです。現在、このグループの活動の軸は2つあり、1つは、遊びと学びの重要性を研究することです。もう1つは、オランダのイエナプランの幼児教育の理念や実践を日本の幼児教育に応用できるよう可視化していくことです。

小学校におけるイエナプラン教育の実践については、日本でも以前に比べて多く研究されるようになってきました。一方で、日本の幼児教育においてもイエナプラン教育への関心が高まっているにも関わらず、その研究の数はかなり少ないものです。こういった背景から、イエナプラン教育を導入しようとする園や実践しようとする養育者・先生を支える成果物を生み出していくことを長期的目標としています。

2022年12月からミーティングを重ね、このグループもスタートを切りました。グループメンバーには、日本の幼児教育の現場で働いている人もいれば、現場を持っていない人、日本国外の現場で働いている人もいます。そのため、まずは日本の幼稚園教育要領や保育所保育指針や幼稚園・保育園・認可園、幼稚園教諭や保育士の働き方等といった現状について共通認識を持つようにしました。その後、オランダ・イエナプラン教育協会の会報誌「Mensenkinderen」からの記事を読んだり、同協会で紹介されている4～6歳の子どものクラスの実践動画「I want to play」を視聴したりして、印象に残っていることや連想した日本の現場のこと、さらに深めていきたいことを出し合いました。

これらのインスピレーションをもとに、あらためてメンバーで研究テーマとして取り上げたいことを出し合い、初めの研究の大枠を「遊びと学び」としました。この「遊びと学び」から、マインドマップのように、メンバーそれぞれが深めていきたい具体的な研究テーマを広げ、各々が関心と好奇心を持って研究していけるようにしています。

今後は、各自研究を始める前に、遊びと学びの関係性や重要性の共通認識を持つべく、2023年2月にミーティ

ングを行う予定です。そこでは、イエナプラン教育における「遊び」、レッジョ・エミアリアにおける「遊び」、そして、日本の幼児教育における「遊び」の概要を捉えることを目的にしています。「遊び」に対する認識の重なる部分や異なる部分を共通認識として持つことによって、メンバー各自が客観的視点を含んだ研究を進めやすくすることがねらいです。

以上の研究グループの活動の他、3週間に1度の定例会も行ってきました。定例会では、参加のできる研究部員が集まり、研究に関することやぜひ共有したい近況、そして、各研究グループの進捗や相談等を行います。リラックスした雰囲気の中、互いに情報交換したりサポートし合ったりすることができました。

さて、まるまる会とはなんぞや？と冒頭で思われた方もいらっしゃるかもしれません。研究部では、熱心で真面目に取り組む研究だけでなく、話題提供をしてくれる研究部員を中心に、(オンラインでありながら気持ちは)サークルになってみんなで語らおう、という時間も設けています。

これまで2022年は2回、開催することができました。第1回は、広島県の公立小学校で教頭をされている野島崇志さんを囲んでの会となりました。イエナプラン教育のワールドオリエンテーションについて修士論文を書かれており、その研究について詳細にお話していただきました。研究過程や成果だけでなく、野島さんの今後の夢や野望も熱く語ってもらい、とても刺激的な会となりました。

第2回は、協会の理事であり、東京の保育園で保育者として日々子どもたちに向き合う矢澤あいりさんの会となりました。国際バカロレアで学び得たことや、イエナプランとの出会い、そして、保育者を志した理由等について、じっくりお話していただきました。自身の人生の中で経験してきたことと、現在の教育に対する疑問とをつなげて考え、自ら掲げるミッションを胸に、日々の実践に取り組まれていることがひしひしと伝わってきました。

次回の第3回は、名古屋市教育委員会指導主事をされている岩本歩さんのまるまる会です。名古屋市や山吹小学校での実践や、多くの学校を視察してきた上で感じること等のお話をさせていただきます。今回も濃い時間になるのではないかと、とても楽しみです。



自律的でゆるやかに動き始めた研究部の活動、いかがでしたか？ぜひ今後の活動も楽しみにして頂けたら嬉しいです。

また、「一緒に研究していきたい」、「自分の実践をイエナプラン教育の発展に活かしたい」という方々をいつでも歓迎しています。研究部入部を希望される、以下の条件に合う方は、ぜひ下記ご連絡先までメッセージください。お待ちしております！

◆条件

- ・日本（及びオランダ）イエナプラン教育専門教員資格認定研修修了者
もしくはイエナプラン教育の実践を3年以上している方
- ・協会会員

◆連絡先

info@japanjenaplan.org

oVice 会員交流会

報告：土岐幸司

11月20日に日本イエナプラン教育協会の第1回会員交流会が行われました。といっても会場はオンライン。oViceというサービスを使って、仮想パーティ会場を作ってそこでお話しするというものです。

はじめは皆さん慣れているZOOMを使って自己紹介をしました。開場当初は「ここは本当にパーティ会場か？」と思うほど緊張感のある雰囲気でしたが、少しずつ慣れて、途中からなんとリヒテルズ直子さんもサプライズ登場。イエナプランに出会うまでのいきさつなどのお話などしてくださいました。

後半はoViceを使って、気軽におしゃべりをする時間でした。会話の輪の後ろで立ち聞きする人、あっち行ったりこっち行ったりする人、まったく動かない人など本当のパーティ会場のようでした。初めて会う人とも、イエナプランを通じて会話がはずみ、つながれる場になりました。またやりましょう！

oVice？なにまた新しいサービス？怖い！という方もいらっしゃるかもしれませんが、懇切丁寧にサポートします。お気軽にご参加ください！

oViceの画面



各学習会・サークル

■公式埼玉学習会

報告：田村悠子

11/27 にふじみ野市で対面の学習会を開きました。神奈川、東京からも参加してくださいました。

内容はまず自己紹介と交流、そしてDVD「明日の学校に向かって」を見て小グループで対話、最後に20の原則を読んで対話しました。

埼玉学習会自体が久しぶりで、さらに対面での学習会も久しぶりでなんだか懐かしい気持ちに。なにかを学んでスッキリするというよりはモヤモヤする感じがあり「やっぱりいいなあ」と思いました。今後も埼玉の各地で開催していく予定です。



次回は、2月23日（木・祝）に開催予定です。興味がある方、ぜひ以下のアドレスまでご連絡ください
saitama@japanjenaplan.org

■公式いえなごやサークル

報告：若杉 逸平、倉田 美純

いえなごやサークルでは、名古屋市や岐阜市で以下のような学習会を行いました。

〔名古屋〕

● 9月23日（金・祝）先生のためのイエナプラン学習会 vol. 1
 @イーブルなごや

『イエナプラン 20の原則 1 を読んで対話しよう』

イエナプラン教育のビジョンを大切にしたいという思いで「先生のためのイエナプラン学習会 @名古屋」をスタートしました。第1回は、イエナプラン教育の概要について知り、広島県にある常石とともに学園を視察した仲間のエピソードトークをもとに、20の原則1について対話しました。

● 10月30日（日）先生のためのイエナプラン学習会 vol. 2
 @イーブルなごや

『オランダの学校、先生ってどんな？』

第2回は、夏休みにオランダの学校を視察した仲間の報告会を行いました。また、帰国後のマインドの変化や実践のエピソードから「自分らしく成長していくとは？」という問いをもらい、20の原則2に関連させて考え、対話しました。



● 11月26日（土）先生のためのイエナプラン学習会 vol. 3

@イーブルなごや

『安心感をもてる場のつくり方～ちがいを豊かさ～』

第3回は、イエナプランのビジョンを大切に学級実践している仲間のクラスづくりや担任と子どもたち、子どもたち同士の関わりのエピソードから『安心感をもてる場のつくり方』について考え、対話しました。また、20の原則6にある「それぞれの人がもっているかけがえのない価値を尊重しあう社会を作る」ということについての考えも深めました。



● 1月28日（土）先生のためのイエナプラン学習会 Special

『ADVENTURE IN THE CLASSROOM～アドベンチャーを日常に～』

講師に甲斐崎博史先生をお招きし、アドベンチャー教育について学びました。学校や学級など、子どもたちの日常にどのようにアドベンチャーを取り入れていくか、様々なアクティビティを通して体験的に学ぶことができました。また、子どもたちの学びを最大限尊重するためには、教師のファシリテートする力が大切だと改めて実感することができました。



〔岐阜〕

● 9月10日（土）先生のためのイエナプラン勉強会

@岐阜県図書館

～『イエナプランのエッセンス』を取り入れた則武小学校の挑戦～

20の原則を読んだあと、イエナプラン教育のエッセンスを取り入れた教育活動を行なっている、岐阜市立則武小学校の取り組みについて、校長の松岡先生と教務主任の大島先生からお話を伺い、それをもとに参加者同士が対話的に学び合いました。



● 10月23日（日）先生のためのイエナプラン勉強会@岐阜県図書館

『共に生きることを考える』～8つのミニマムから～

20の原則を読んだあと、8つのミニマム（インクルーシブな考え方を育てる、学校のあり方を人間的で民主的なものとする、対話、教育の人類学化、ホンモノ性、自由、批判的思考を育てる、創造性）をキーワードにして、参加者同士がじっくりと考え対話しました。

● 12月17日（土）先生のためのイエナプラン学習会ぎふ@岐阜県図書館

『オランダの学校で感じたこと』タナバシ ヒロコさんより

20の原則を読んだあと、現在オランダの日本人学校で勤務されている棚橋さんにオンラインで参加していただき、オランダに住んで感じることやイエナプラン校に限らずオランダの学校の様子などについてお話いただきました。お話しを受けて参加者同士がじっくりと考え対話しました。

今後も、イエナプラン教育を学ぶ勉強会や実践につながる学習会などを開催できればと思っています。

■公式おかやま学習会

報告：稲森理恵

この度、日本イエナプラン協会公式学習会となりました。これからどうぞよろしくお願いいたします。

<2022活動報告>

◎3月20日(日)@Zoom

「子どもと作る集中と協働をめざした教育空間」と題して、島謙太郎さんにお話しいただきました。

◎6月17日(金)@Zoom

イエナプランにまつわる座談会を開催しました。

◎12月17日(土)@Zoom

常石とともに学園を視察した氷川雅則さんによる報告会をおこないました。

岡山県でのイエナプラン教育の広がりを目指し、これからリアル開催含め、学習会を重ねていきたいと思っております。

■公式学習会 in オランダ

報告：山地芽衣

2022年7月の日本イエナプラン教育全国大会で、学習会 in オランダのメンバーが発表「オランダと日本の社会的背景から考えるイエナプラン」に参加させていただきました。その際、ご参加いただいた方々から、疑問や感想を含む予想以上の反応をいただきました。これを機に、「オランダ在住のメンバーに、オランダの社会や教育に関する疑問を聞いてみよう」ということをコンセプトにした企画を立てました。

数回のミーティングを重ねて、参加者の方々からあらかじめ質問を募集、私たちで質問を整理、1月24日(土)にオンライン開催となりました。当日は5人の方たちにご参加いただき、日本とオランダの国境を越えた情報交換になりました。オランダでの先生たちの働き方、学校の多様性、暮らし方、社会と学校のつながり等、話題は幅広く及びました。さらに、日本でイエナプラン教育を実践する際の壁や苦労、日本社会への違和感等、参加されたみなさんから聞かせてもらうことができ、メンバーの私たちにとっても日本の現状を学ぶ機会になりました。

次回は3月にミーティングを行い、次の企画を練っていきます。

公式神奈川(湘南)サークル

報告：菊池萌

神奈川(湘南)サークルでは、土曜日の朝、お気に入りの飲み物を片手にオンライン座談会を開催しました♪「私の [#イエナプラン](#) のキーワードは●●!!」をテーマに自己紹介を中心に楽しくお話ししました。[#対話](#) [#問い](#) [#マルチプルインテリジェンス](#) [#多様性](#) [#共に生きる](#) などなどそれぞれの視点からのイエナプランにまつわるキーワードが出てきました。[フリースクール](#)、[学童](#)、[保育](#)、[小学校](#)、[寺子屋](#) など、様々な実践の場からのシェアありがとうございました。イエナプランが「方法」ではなく、「一人ひとりの子をその子らしく最大限の可能性を引き出して育てることを目指した子育てのビジョン」であること。そしてそれをどう捉えて各自の実践の場や社会に生かすのか。住んでいる地域を問わず、オンラインだからこそ集まれるメンバーで様々な意見を交わすことができました。

《今期の活動報告》

イエナプラン神奈川(湘南)オンライン座談会



2022年10月15日(土)9~10時 (放課後タイム~10時30分) zoom開催

■お知らせ

世田谷・中野公式学習会について

報告：浅野聡子

世田谷・中野学習会は、2022年末をもって活動を終了する運びとなりましたことをご報告いたします。世話人の状況として、イエナプランそのものを学ぶ機会を定期的に開催する見通しをもつことが困難となったためです。

世田谷でスタートし、ほぼ毎月開催していた時期は、イエナプランの原則や学習指導要領を読んで対話する時間を重ねていました。自分の現場を少しでもよいものにしたいというたくさんの方に出会い、開催する側も刺激や活力を頂き、励まされてきました。学び合う場を集って頂いた皆さまに感謝いたします。Facebookのグループにも多くの方にご参加頂いておりましたが、ご期待に沿えず閉会となり、申し訳ありません。

私事ですが、公立の教員を退職し多様な教育現場を経験したり、娘たちの成長に伴い保護者として地域コミュニティに参加したりする機会を得る中で、イエナプランへの関心を失ったということではなく、むしろ「共に生きることを学ぶ」という在り様に、心から共感するようになりました。学校教育以前に、そして学校教育の先に、そのような理念が体现された地域社会があることの重要性を感じます。イエナプランの原則にも、共に生きる社会の創り手となることの大切さが謳われていますが、誰にとっても居場所や繋がりがある地域づくりを目指し、身近なところから少しずつ行動していきたいと考えています。その過程で、イエナプランからの理念を思い返してはまた気づきを得ることがきっとあると思っています。

最後になりましたが、学習会を牽引して下さった中川綾さん、会場を提供して下さい長尾彰さん、東中野キングスガーデンの奥山さんには大変お世話になりました。そして、学習会やサークル活動を促進し、支え、運営に尽力して下さい協会の理事、事務局の皆さま、ありがとうございました。

ほんの木出版主催 <本を使って Zoom で学ぶ『イエナプランを学ぶオンライン講座』>

2021、2022年に続き2023年も、ほんの木出版主催の<本を使って Zoom で学ぶ『イエナプランを学ぶオンライン講座』>が開催されます。コースは基礎編、応用編、学校・チーム編の3コース。また2023年は保護者を対象とした『家庭でできるイエナプラン講座』（2023年4月～7月全4回）も開かれます。講師は当協会特別顧問のリヒテルズ直子さんです。詳しくはほんの木HPをご覧ください。

https://www.honnoki.jp/blog_jena/archives/821

※すでに始まっている講座もありますのでご注意ください。

The screenshot shows the website for 'Honnoki' (ほんの木). The main heading is '『イエナプランを学ぶオンライン講座』 (2023) 開催のお知らせ (受付開始 2022年12月2日AM10:00) 講師 リヒテルズ直子さん'. Below the heading, there is a social media sharing bar with icons for Facebook, Twitter, and Email. The main text reads: '2021、2022年に続き2023年も、本を使ってZoomで学ぶ『イエナプランを学ぶオンライン講座』を開催します。コースは基礎編、応用編、学校・チーム編の3コース。また2023年は保護者を対象とした、保護者のための『家庭でできるイエナプラン』を開催いたします。' There is also a note: 'なお講師の都合により、一部日程に変更が生じております。日程を今一度ご確認のうえお申し込みくださいますようお願いいたします。' On the right side, there is a search bar and a 'Category' section with several items listed, including 'フレックせんせいのお話' and 'イエナプラン環境なきコンセプト'.

各公式学習会・サークルのご案内

- ・ 公式宮城サークル miyagi@japanjenaplan.org
- ・ 公式埼玉学習会 saitama@japanjenaplan.org
- ・ 公式千葉・浦安学習会 chiba@japanjenaplan.org
- ・ 公式多摩学習サークル tama@japanjenaplan.org
- ・ 公式神奈川（湘南）サークル syounan@japanjenaplan.org
- ・ 公式佐久穂サークル sakuho@japanjenaplan.org
- ・ 公式いえなごやサークル nagoya@japanjenaplan.org
- ・ 公式愛知 豊田サークル toyota@japanjenaplan.org
- ・ 公式神戸明石学習会 koubeakashi@japanjenaplan.org
- ・ 公式広島学習会 hiroshima@japanjenaplan.org
- ・ 公式福岡学習会 fukuoka@japanjenaplan.org
- ・ 公式学習会 in オランダ oranda@japanjenaplan.org
- ・ 公式徳島学習会 tokushima@japanjenaplan.org
- NEW! ・ 公式おかやま学習会 okayama@japanjenaplan.org